

大肥下河内遺跡

2006年

日田市教育委員会

序 文

平成17年3月22日、日田市・日田郡天瀬町・同大山町・同前津江村・同中津江村・同上津江村の合併をもって、人口約7万7千人、面積約666 k m²の新・日田市が第一歩を踏み出しました。

今回報告します大肥下河内遺跡は、この日田市の北西部、福岡県境に近い南北に細長い谷に位置します。大肥川沿いに広がるこの谷では平成9年度より大規模な農業基盤整備事業が行われ、それに伴う遺跡の発掘調査を行ってきました。その結果、この地域が北部九州と日田盆地を結ぶ中継地さながらに、古くから開け栄えてきた土地であることが明らかとなりました。

調査では、縄文時代の生活を垣間見せる多くの遺構が発見され、たくさんの土器や石器がまとまって出土するなど、この大肥下河内遺跡が、今後日田市の縄文時代を考えていく上で欠かすことのできない遺跡であることが解りました。

本書が、これからの文化財保護や地域の歴史の解明、また学術研究や教育現場での資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者ならびに調査中に便宜を図っていただきました調査地周辺の住民の方々、また作業に従事いただきました皆様方に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成18年2月

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

本文目次

I	調査に至る経過と組織	1
	(1) 調査に至る経過	1
	(2) 発掘調査の経過と調査組織	2
II	遺跡の立地と環境	4
III	調査の内容	5
	(1) A区の調査	5
	1. 調査概要	5
	2. 遺構と遺物	5
	(2) B区の調査	11
	1. 調査概要	11
	2. B区上層の遺構	11
	3. B区下層の遺構と遺物	13
IV	まとめ	23



写真1 作業風景

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図 (1/3,000)	1
第2図	周辺遺跡分布図 (1/40,000)	4
第3図	A区遺構配置図 (A1区上層 1/500、A1区下層 1/250、A2区 1/500) ...	6
第4図	A区1～3号土坑実測図 (1/30)	7
第5図	A区出土縄文土器実測図1 (1/3)	8
第6図	A区出土縄文土器実測図2 (1/3)	9
第7図	A区出土石器実測図 (2/3、1/2)	10
第8図	B区遺構配置図 (B区上層 1/600、B区下層 1/500)	12
第9図	B区1・2号竪穴遺構実測図 (1/60)	13
第10図	B区1～3号集石遺構実測図 (1/30)	14
第11図	B区1～6号土坑実測図 (1/30)	16
第12図	B区7～10号土坑実測図 (1/30)	17
第13図	B区溝状遺構実測図 (1/80)	18
第14図	B区出土縄文土器実測図1 (1/3)	19
第15図	B区出土縄文土器実測図2 (1/3)	20
第16図	B区出土石器実測図 (2/3、1/2)	21

表 目 次

第1表	県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧	2
第2表	出土縄文土器観察表 (1)	24
第3表	出土縄文土器観察表 (2)	25
第4表	出土縄文土器観察表 (3)	26
第5表	出土石器観察表	26

挿 入 写 真 目 次

写真1 作業風景

写 真 図 版 目 次

写真図版1	調査区全景/A区全景・近景/A区1・3号土坑
写真図版2	A区2号土坑/B区近景/B区1・2号竪穴遺構/B区2号集石遺構
写真図版3	B区3号集石遺構/B区1・2・4・5号土坑
写真図版4	B区6・7・8・9・10号土坑
写真図版5	出土遺物1 (A区出土縄文土器)
写真図版6	出土遺物2 (A区出土縄文土器/A区出土石器)
写真図版7	出土遺物3 (A区出土石器/B区出土縄文土器)
写真図版8	出土遺物4 (B区出土縄文土器)
写真図版9	出土遺物5 (B区出土縄文土器/B区出土石器)

I 調査に至る経過と組織

(1) 調査に至る経過

平成11年、大分県日田地方振興局耕地課より大明地区担い手育成事業3工区の試掘調査の依頼文が提出された。日田市教育委員会はこれを受けて県耕地課と事前協議を行ったが、協議の中では遺跡が確認された場合、基盤整備事業の期間短縮のため盛土工法に変更もあり得ることから、なるべく時間を要する設計の手間を省くため、試掘調査を終了した後に遺構のあり方を見て基盤整備の実施計画設計を作成したいという意向もあり、試掘調査の対象区域は工区全体を対象に行なうこととなった。

試掘調査は平成12年1月26日～2月12日までの期間実施することとなったが、事業区域が谷筋ごとに細かく分散していたことから、調査前に市農政課に依頼し、それぞれの工区名を教えていただいた。それによると、工区は東見寺、諸筋、下河内、鰐工区の大きく4つに分かれており、こうした工区ごとに機械と作業員を使つての確認作業を進めていった。

東見寺工区は、県道熊取大鶴線の南側部分にあたり延工区面積は工区の中で最も狭かったものの、いくつかのトレンチからは建物跡と見られるピットが少数と古墳時代前期の遺物を含んだ包含層が確認された。

諸筋工区は鶴河内川より西側にあたるが、2つのトレンチから建物跡と推測される少数のピットと古代末から中世前期にかけての時期と推測される土師質土器片が出土した。

下河内工区は、鶴河内川を挟んで両側の河岸段丘上にあたり、工区としては最も広い区域であった。ここでは、鶴河内川左岸側の多くのトレンチからまばらながら建物跡と推測されるピットと縄文時代の土器片や石器、中世の土師質土器片や輸入陶磁器片が出土した。

鰐工区は、鶴河内川支流の鰐川流域一帯であったが、この工区からは遺構・遺物は確認されなかった。



第1図 調査区位置図 (1/3,000)

以上の結果を平成12年2月15日付けで大分県日田地方振興局耕地課に文書報告し、翌年度の6月21日には県耕地課・県文化課・市農政課を交えて大分県日田地方振興局会議室で遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議では、県文化課より道路については盛土する場合には発掘調査は必要ないなど文化庁次長通知や九州地区基準とは異なる独自の意見も出されるなど、解釈の仕方について齟齬が生じることとなり県耕地課には混乱を招きご迷惑をおかけすることになったが、最終的には必要に応じて確認調査を実施し、その調査主体は市教育委員会が行い、設計が終わってから市文化課に連絡をしていただくということを確認し、この協議は終了した。

その後、現地を確認した際に、下河内工区内の遺跡が存在する場所で切土掘削工事が実施されていたため、直ちに県耕地課とこの件に関して協議を行い、遺跡の対象範囲のとらえ方がよく理解を得られず、工事を発注したとのことであったため、急いで設計をお願いし、発掘調査の範囲や期間・費用について協議を行った。この時の換地計画原案では3工区で確認された遺跡のうち切土掘削による工法で記録保存に必要な発掘調査を要する区域は下河内工区に限られることになり、遺跡名を大肥条里下河内地区とし、平成12年12月1日に委託契約書を取り交わし発掘調査を実施することとなった。

(2) 発掘調査経過と調査組織

この地区の発掘調査に際して、換地計画原案を見ると切土掘削による調査対象区域が2カ所に大きく分かれることから、A、Bの2つの地点に調査区を分けることにした。調査は、すでに工事にとりかかっていたA地点から実施することにした。

A地点は、平成12年12月4日から調査を開始したが、協議の中で農道を挟んでさらに北と南に切土区域が分かれていたため、農道部分と切土の2か所を結ぶ区域は、遺跡全体の内容を把握するための確認調査に止めることとし、12月26日に調査を終了した。

第1表 県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧

試掘年度	工区名	試掘結果	時代	処置	遺跡名	発掘調査年度	発掘調査期間	調査面積(m ²)	備考
平成9年度	嶋田工区	柱穴、包含層	古代・中世	盛土保存	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成9年度	今中工区	なし	-	工事実施	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成9年度	中村工区	住居跡、石棺墓、小児用甕棺墓	弥生時代 ～中・近世	発掘調査	大肥中村遺跡	平成10年度	98.07.07 ～98.12.30	10,000	A区のみ報告済、A～C区概報刊行
平成10年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代 ～弥生時代	発掘調査	大肥祝原遺跡	平成11年度	99.05.16 ～00.01.17	5,100	A～D区、うちA～C区は報告済
平成10年度	上村工区	竪穴、溝、土坑、柱穴	弥生時代 ～中世	発掘調査	大肥上村遺跡	平成11年度	99.09.28 ～99.10.29	950	報告済
平成10年度	茶屋ノ瀬工区	竪穴、溝、土坑、柱穴	中世	盛土保存	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成10年度	小鶴工区	竪穴住居、溝、柱穴	弥生時代	盛土保存	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成11年度	鶴河内工区	竪穴、集石、土坑、溝、包含層	縄文時代	発掘調査	大肥下河内遺跡	平成12年度	00.12.04 ～01.02.28	5,950	本報告
平成11年度	吉竹工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	古墳時代 ～中世	発掘調査	大肥吉竹遺跡	平成12 ～13年度	01.01.29 ～01.05.24	8,270	報告済
平成13年度	大肥工区	竪穴住居、流路、甕棺墓、石棺墓	弥生時代 ～古墳時代	発掘調査	大肥遺跡	平成14年度	02.05.27 ～03.02.13	8,200	A～C区、うちA-1区は報告済
平成13年度	竹本工区	なし	-	工事実施	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成14年度	高野工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	弥生時代 ～中世	発掘調査	高野遺跡	平成14 ～15年度	03.01.16 ～03.10.20	9,000	未報告
平成14年度	古屋敷工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代 ・中世	発掘調査	古屋敷遺跡	平成15年度	03.05.19 ～03.10.19	7,100	報告済
平成14年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	中・近世	発掘調査	祝原遺跡	平成15年度	03.05.19 ～03.08.04	4,500	報告済
平成14年度	白岩工区	なし	-	工事実施	-	-	-	-	試掘調査のみ

※網掛けは発掘調査実施遺跡

B地点は、工事を急ぐ関係から、平成12年12月8日からA区と並行して調査を開始した。なおこの地点も切土部分と水路掘削部分により切土範囲が3ヶ所に分かれるため、A地点と同様、切土以外の区域も遺跡の全体を把握する目的で、全体を剥いで遺構検出を行なうこととなった。また、この地点については、盤土下でピットなどが検出され、その下層に縄文時代の包含層があり、遺構が複数の層位に及ぶ可能性があることから、層ごとの遺構の内容を把握するため、まず全体に機械によりトレンチを入れ、それから遺構の存在する範囲を確定し、さらに切土の区域を中心に遺構検出・掘下げを繰り返すこととなった。このため、調査が思ったより手間取ることになり、平成13年2月28日ようやく終了することができた。

整理作業は、平成13年2月1日から3月28日まで日田市埋蔵文化財センターで行なった。

なお、調査関係者は以下のとおりである（職名は当時のままとしている）。

平成12・13年度（発掘調査・整理作業・報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査統括 原田俊隆（同文化課長）

調査事務 石井英信（同文化課課長補佐兼文化財係長）佐々木豊文（同主査、～平成13年3月）

島崎誠司（同主査、平成13年4月～）園田恭一郎（同主任、平成13年4月～）

江田香織（同臨時職員、～平成13年3月）原田恭子（同臨時職員、平成13年4月～）

調査担当 行時志郎（同主任）吉田博嗣（同主任）

調査員 若杉竜太（同主事）渡邊隆行（同主事）

来訪者 下村 智（別府大学助教授）

発掘調査員 池田貞夫、石井アヤ子、石井多吉、石井チエコ、石井俊政、一ノ宮高喜、一ノ宮松雄、一ノ宮森男、伊藤一男、伊藤智恵子、井上賢信、井上次男、井上フミ子、梅崎カズ子、梅原剛志、岡部 進、梶原利夫、梶原タマ子、梶原一二三、梶原ミズエ、北向サダ子、北向チズ子、黒木達男、五反田静子、後藤孝市、財津由太、高倉知子、高倉由佳、高倉富美子、高倉美利、田中 昇、筒井英治、半田ツギエ、平川クミエ、本田早苗、本田忠勝、堀 英子、松岡初次、本河尚記、室井キミ子、森山国雄、森山熊夫、森山春義、森山ミチ子、森山八重子、柳原 貢、山下勇美子、吉田勝秋、和田常次郎、和田文子、渡辺吉之助

整理作業員 梶原ヒトエ、中原琴枝、平川優子、吉田千津子

平成17年度（報告書作成・印刷）

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 後藤 清（同文化財保護課長）

調査事務 高倉隆人（同文化財保護課長補佐兼埋蔵文化財係長）伊藤京子（同専門員）

中村邦宏（同主事補）

報告書担当 今田秀樹（同主任）行時志郎（農林経済部農政推進課主査）

調査員 土居和幸（文化財保護課副主幹）行時桂子（同主任）若杉竜太（同主任）

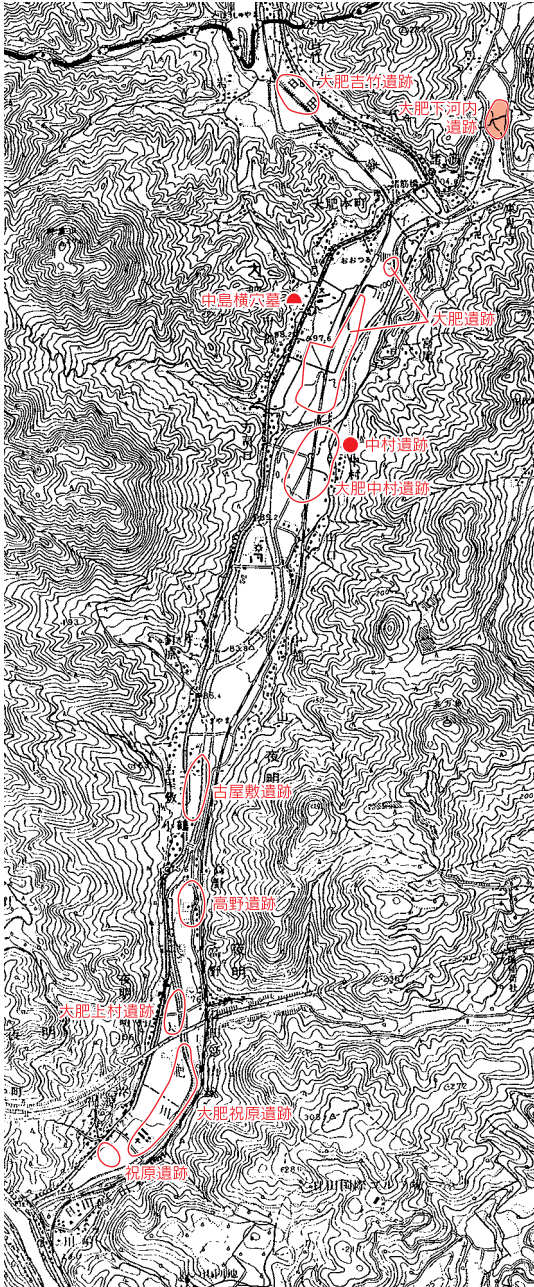
渡邊隆行（同主任）矢羽田幸宏（同主事補）

II 遺跡の立地と環境

遺跡は、日田市西部大肥川の支流鶴河内川左岸に形成された河岸段丘上に位置する。遺跡地より鶴河内川を南西へ500mほど下った地点で大肥川と合流した後、南流し、三隈川（筑後川）と合流する。

この地域では近年の圃場整備に伴う発掘調査が多く実施され、当地の歴史が明らかにされつつある。

大肥川沿いの遺跡を上流から概観すると、まず鶴河内川との合流点から1kmほど上流の左岸に位置する大肥吉竹遺跡⁽¹⁾では、縄文時代中期の船元式土器が出土したほか、古墳時代後期～奈良時代の集落を確認されている。2河川の合流点より約900m下流にある大肥遺跡⁽²⁾では、弥生時代前期末～後期の集落・墓地・流路や古墳時代の集落が確認され、特に流路からは三叉鍬などの農具や県内初例となる漆塗木甲など、大量の木製品が出土している。対岸の大肥中村遺跡⁽³⁾では、弥生時代中期～後期の墳墓群や古墳時代～近世の集落が検出され、中世～近世では鍛冶遺構も見つかっている。大肥川流域では古墳は



第2図 周辺遺跡分布図 (1/40,000)

未発見であるが、大肥遺跡の西側丘陵裾部には中島横穴墓⁽⁴⁾が、また大肥中村遺跡の東側丘陵上には工事時に箱式石棺墓が出土した中村遺跡⁽⁵⁾があり、周辺山裾部に当該期の墳墓が存在する可能性がある。大肥中村遺跡から約1.8km下流の古屋敷遺跡⁽⁶⁾では、縄文時代前期の包含層と中世の建物群が見つかり、右岸の高野遺跡⁽⁷⁾では、弥生時代中期～後期の集落と中世の建物群が確認されている。大肥上村遺跡・大肥祝原遺跡A～C区⁽⁸⁾では、弥生時代中期～後期の集落跡が、大肥祝原遺跡D区⁽⁹⁾では、縄文時代後期～晩期の大量の土器と集石が見つかっている。そして、三隈川との合流点からわずかに約400m上流の祝原遺跡⁽¹⁰⁾では、中世の水田跡や近世の集落が検出されている。

このように、この谷は水陸ともに交通の要所であった日田の西の玄関として、古くから重要な位置を占めた地域であったことが、遺跡の内容から窺い知ることが出来る。

【註】

- (1) 渡邊隆行『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集
日田市教育委員会 2004
- (2) 渡邊隆行『大肥遺跡Ⅰ-A-1区の調査の記録-』日田市埋蔵文化財調査報告書第50集
日田市教育委員会 2004
渡邊隆行「大肥条里大肥地区」『平成14年度（2002年度）日田市埋蔵文化財年報』
日田市教育委員会 2003
- (3) 行時志郎『大肥中村遺跡-発掘調査概報-』日田市教育委員会 2003
行時志郎『大肥中村遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第62集
日田市教育委員会 2005
- (4) 横穴の開口が確認されている。
- (5) 『日田市史』日田市 1990
- (6) 渡邊隆行『古屋敷遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第56集
日田市教育委員会 2004
- (7) 若杉竜太「高野遺跡」『平成15年度（2003年度）日田市埋蔵文化財年報』
日田市教育委員会 2004
- (8) 若杉竜太『大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集
日田市教育委員会 2003
- (9) 若杉竜太「大肥条里祝原地区」『平成11年度（1999年度）日田市埋蔵文化財年報』
日田市教育委員会 2001
- (10) 行時桂子『祝原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第61集日田市教育委員会 2005

Ⅲ 調査の内容

(1) A区の調査 (第3図)

1. 調査概要

下河内工区の北側、鶴河内川左岸の河岸段丘上に位置するA区は、調査対象範囲が南北2地点に分かれることから南側をA1区、北側をA2区とした。表土剥ぎを終えた後の遺跡の状況は、A1区では西南方向へ緩やかに傾斜しており、またA2区では南側へ緩やかに傾斜していた。

この両地点の基本層序は、上からI層が暗灰褐色砂質土、II層が黄褐色砂質土、III層が地山である砂礫層となっているが、A1区の一部には、I層とII層の間に黒色土(Ib層)の広がりが見られた。これら土層のうち、I層、Ib層、II層には遺物が含まれており、II層上面において遺構を検出することができた。

2. 遺構と遺物

1) 土坑 (第4図)

A1区の調査区東側、黒色の遺物包含層を掘り下げていく過程で、その下の黄褐色砂質土層上面において3基の土坑を確認した。

1号土坑

平面は不定形プランを呈する。長軸約1m、短軸約0.7m、深さは約13cmを測る。遺構の掘り方は、断面浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦となっている。中からは数点遺物が出土した。

第5図21には2本沈線で直線文と連弧文を組み合わせた文様が施されており、器形は碗形をなすとみられる。文様などから縄文時代前期の轟B式土器に続く曾畑式土器の祖形で従来「野口タイプ」または「プロト曾畑」などと称されていたものであろう。

2号土坑

平面は長楕円形プランを呈する。長軸約1m、短軸約0.6m、深さは約17cmを測る。遺構の掘り方は、断面逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となっている。中からは遺物が複数出土した。

第5図8は横走る隆起線文が施された口縁部片である。縄文時代前期の轟B式土器であろう。

3号土坑

平面は長楕円形プランを呈する。長軸約1m、短軸約0.6m、深さは約7cmを測る。遺構の掘り方は、断面逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となっており、中央やや東よりには小土坑状に一段低くなっている。中からは数点の遺物が出土した。

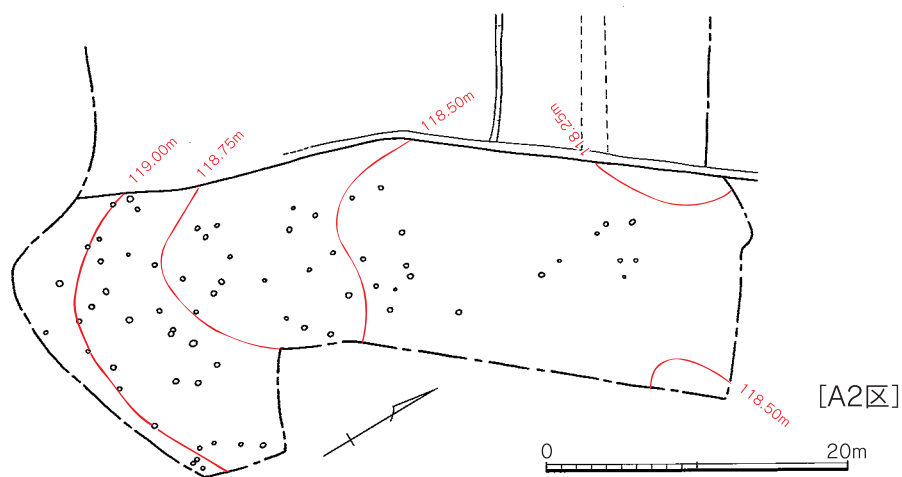
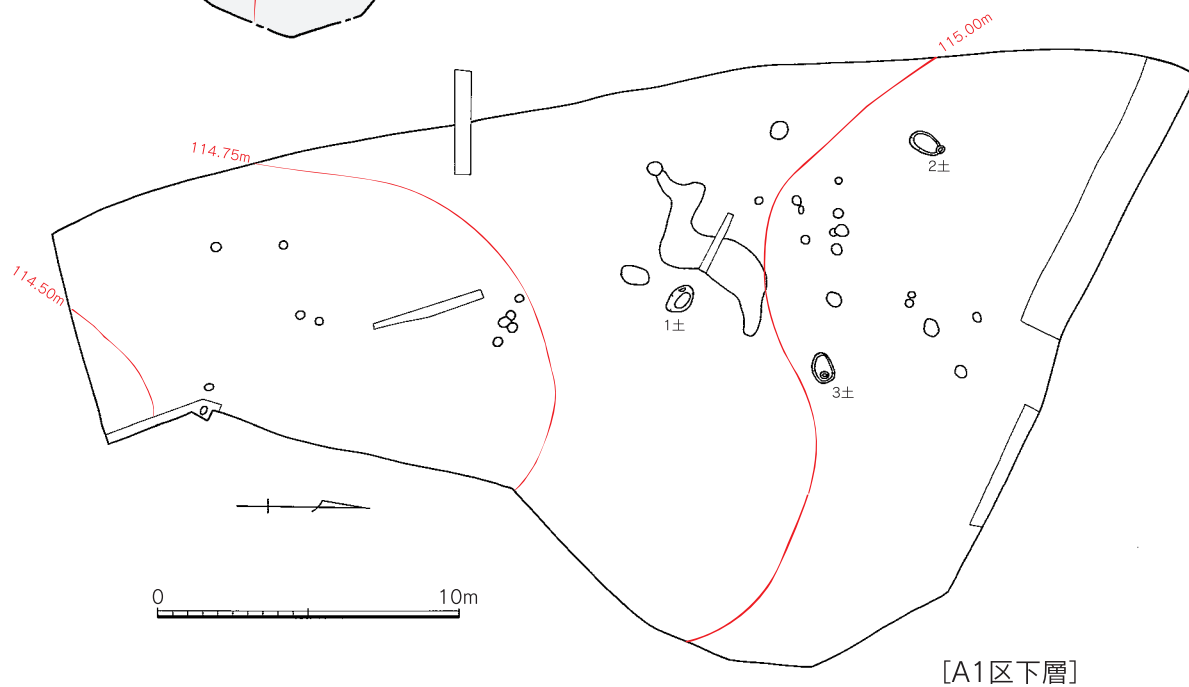
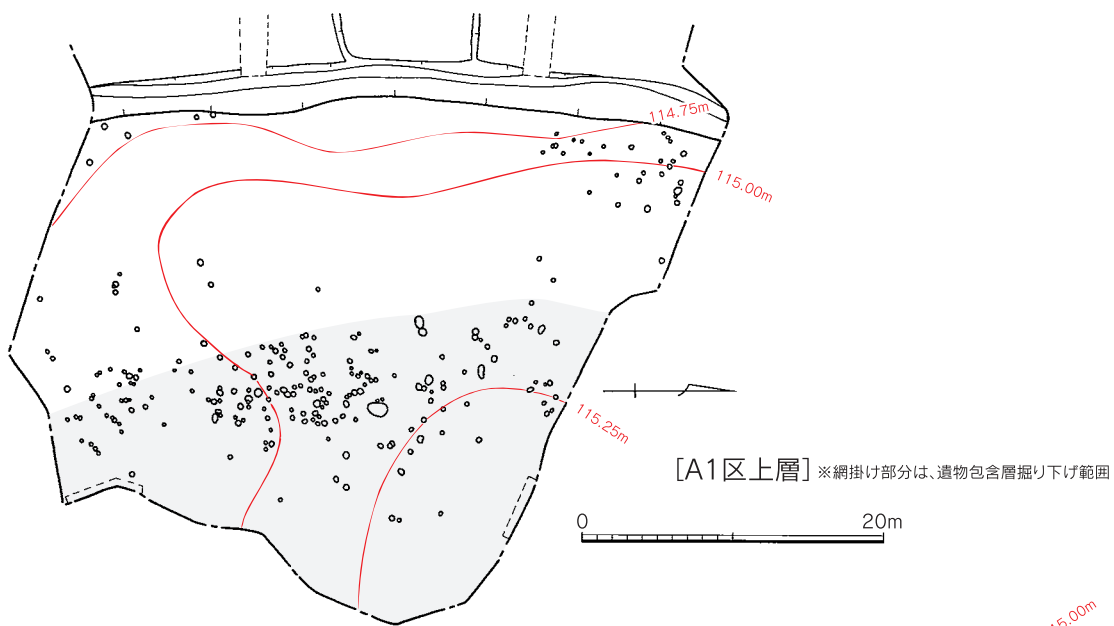
2) その他の遺物

(1) 縄文土器 (第5・6図)

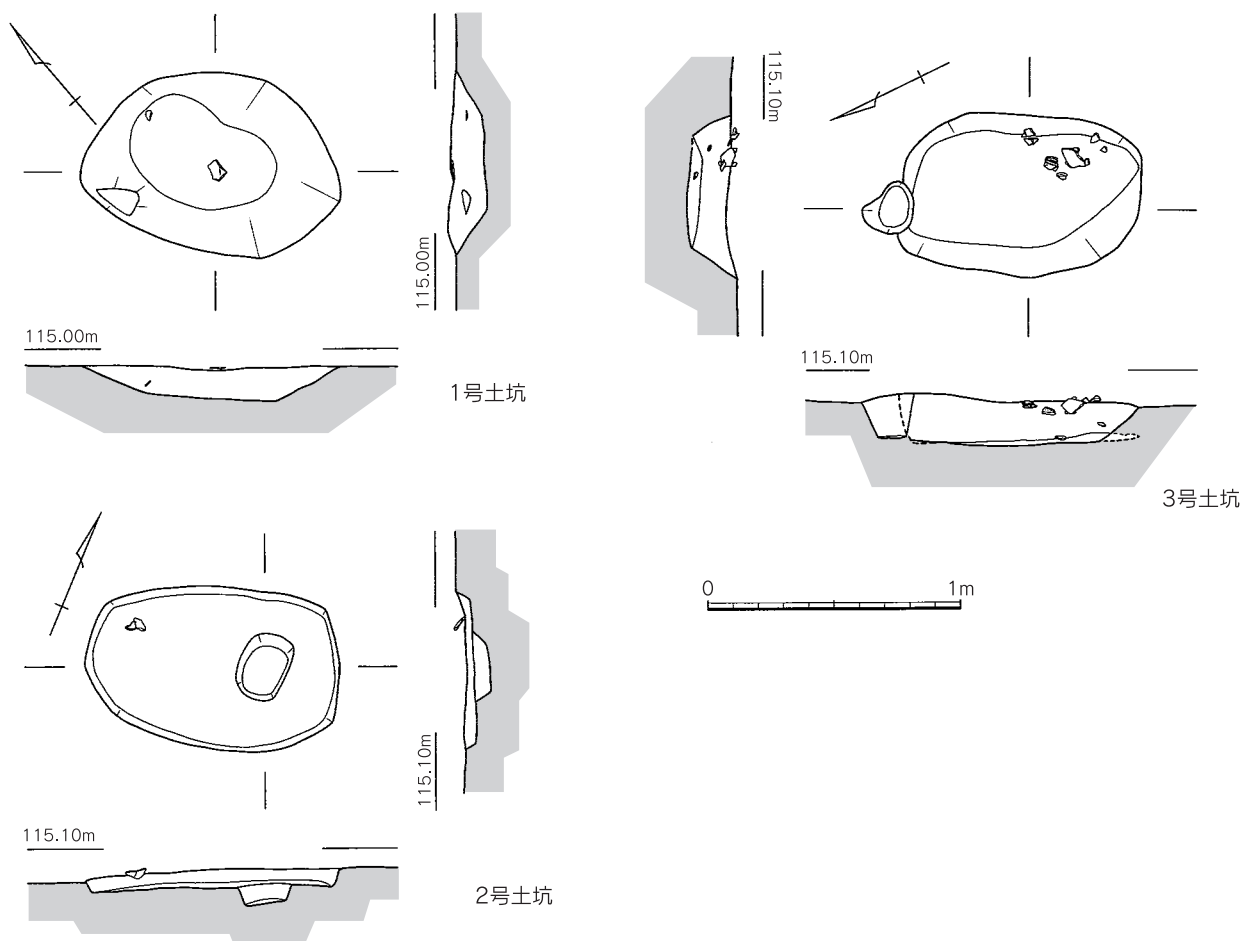
A区からは縄文時代前期を中心に、早期から晩期にかけての縄文土器が確認されている。

1・2は早期の所産である。1は山形押型文、2は網目状となる撚糸文が施されている。

3～16には、口縁部周辺及び胴下半部に施す隆起線文が特徴的な前期の轟B式土器と、同様の時期のものであろうと思われるものを一括した。3～10は口縁部片である。破片が多く全体像が窺える資料は少ないが、3には5条、6には4条、9には3条の横走る隆起線文がみられる。また、



第3図 A区遺構配置図 (A1区上層 1/500、A1区下層 1/250、A2区 1/500)



第4図 A区1～3号土坑実測図 (1/30)

9には焼成後に施された穿孔もみられる。10は、口唇内面端部から外面に向け3本の隆帯を貼付し、その隆帯の下部に刺突連点を横に並べているものである。11～16は胴部片である。13には隆帯に平行する沈線文がみられる。

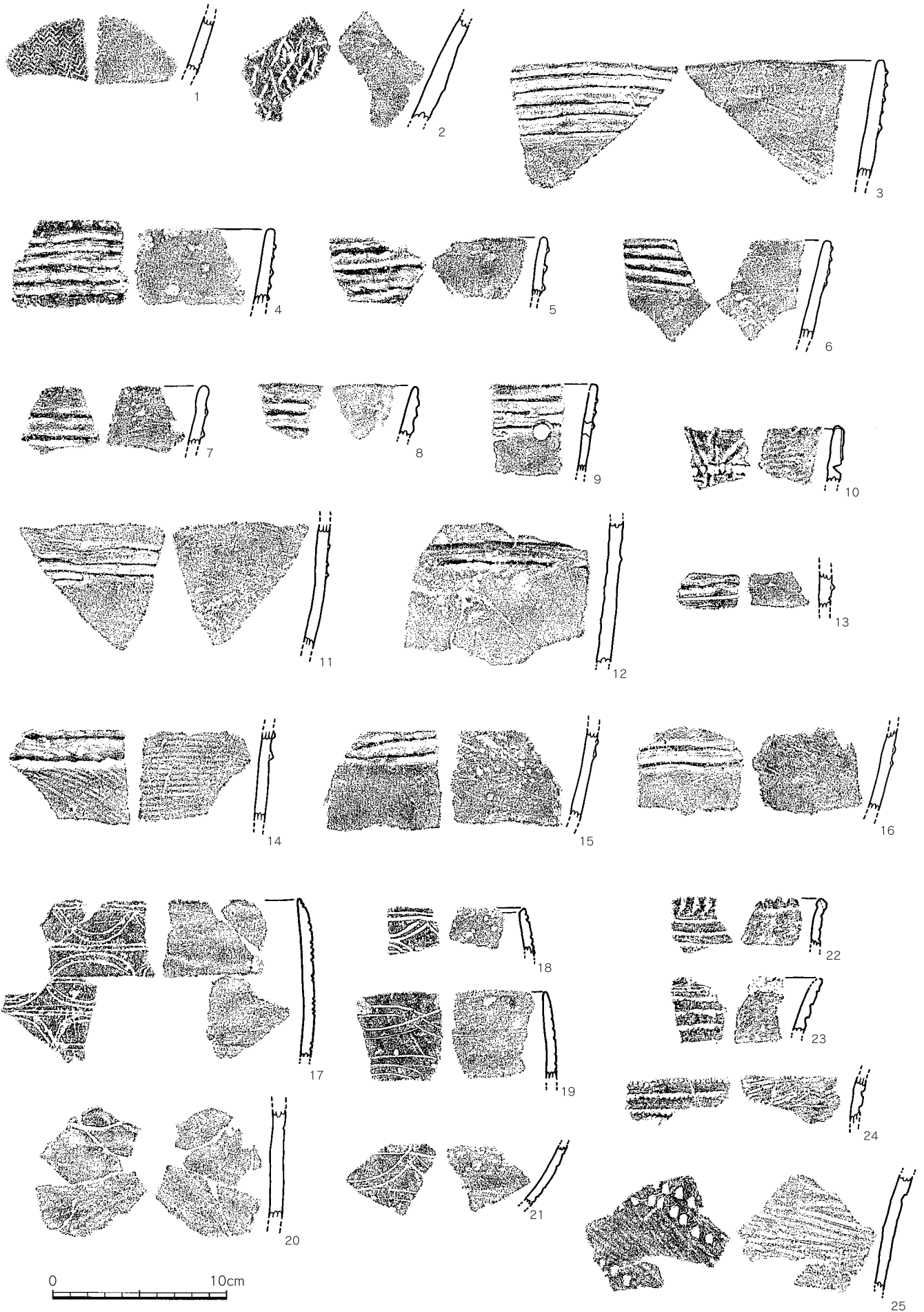
17～21は沈線文の施されたものである。17～19・21は、2本沈線を基本単位とした直線文と連弧文を組み合わせた文様が施されている。これらは前述の轟B式土器に続く曾畑式土器の祖形で、従来「野口タイプ」または「プロト曾畑」などと称されていたものである。20の胴部片も同様のものとみられる。

22～24は、二枚貝の腹縁刺突により横走沈線状の文様を胴部外面に施したものである。22の口唇部には同様に二枚貝腹縁による刺突がみられる。23の口唇部にも細かな刺突ないし刻み目が施されていることが窺われるが、遺存状況が悪く明瞭ではない。これらに類似する資料は市内では手崎遺跡で1点確認されている。前期の所産であろうか。

25は刺突連点により文様が施されたものである。

26・27は外面に全面縄文を施したものである。26はキャリパー状に開く口縁の下半部の破片であろう。文様施文や器形から中期の船元式系の土器とみられる。

28・29は同一個体である。胴部はやや張り、外傾する口縁部はややキャリパー状に内湾する。内外面とも二枚貝による調整痕がみられるもの、文様等は施されていないため、時期等は不明であるが、その器形から前述の26・27と同じ中期の所産であろうか。



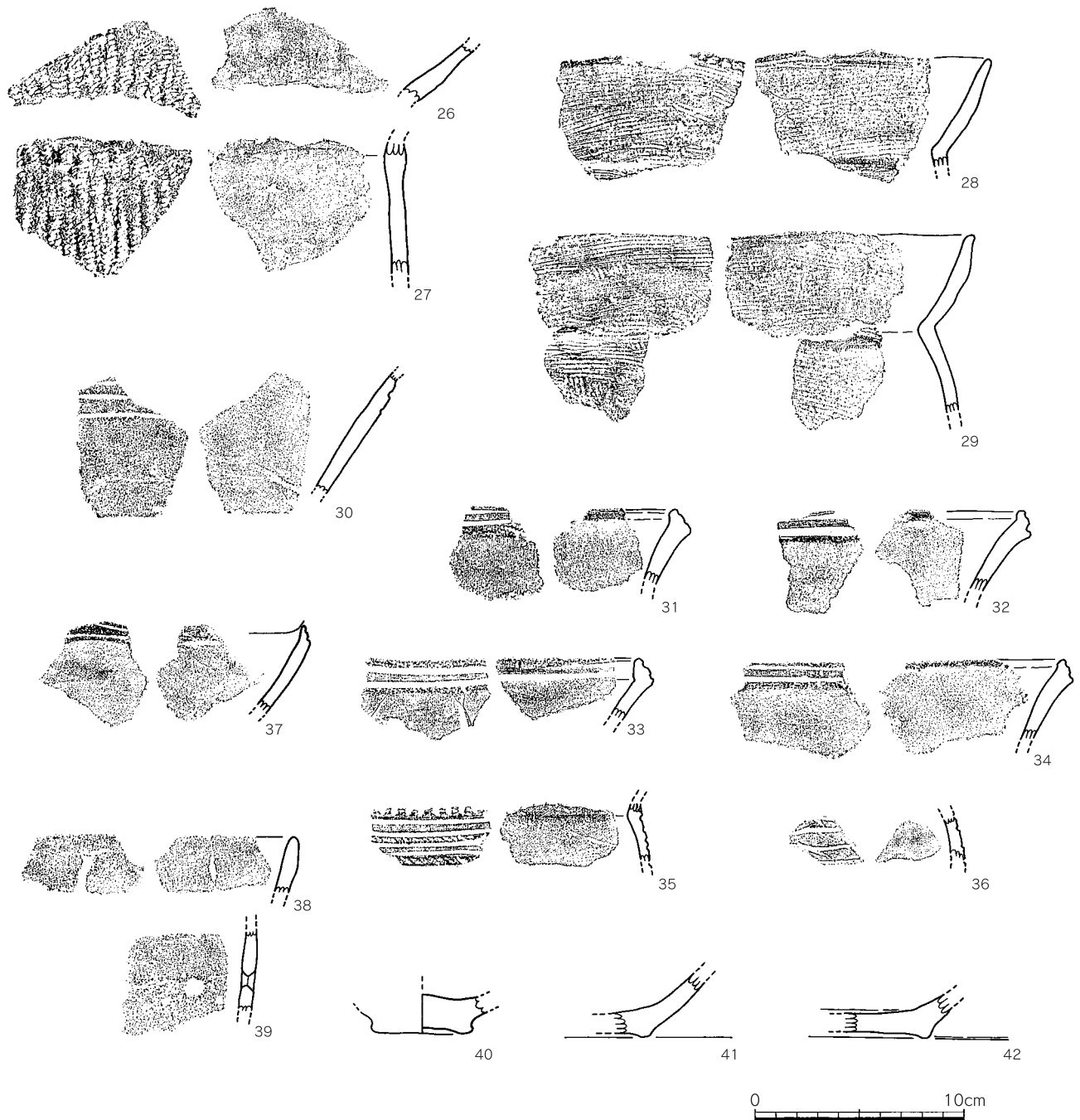
第5图 A区出土绳文土器实测图1 (1/3)

30は鉢形土器の胴部片である。その上部には横走る沈線文がみられるものの、その他の文様・調整等は器面が荒れているため不明瞭である。その器形などから後期中葉の所産と考えることも出来る。

31～37は後期後半の西平式土器とそれに後続するものを一括した。31～34は深鉢形土器の口縁部片であり、35・36は胴部片である。31・33・35には縄文が施されている。36は沈線のみで文様が描かれていることやその沈線の雰囲気などから、他のものよりも新相とみられる。37は小振りな鉢形となるものである。

38・39は無文土器である。38は口縁部片、39には焼成後の穿孔がみられる。

40～42は底部片である。その器形などから後期後半の所産と見て取れよう。



第6図 A区出土縄文土器実測図2 (1/3)

(2) 石器 (第7図)

1～10は石鏃である。何れも基部に抉入のある凹部無茎鏃とみられる。4と8の基部の抉りは非常に浅いが、1などは基部に深く抉りが入るものである。なお、6は剥片鏃である。石材的には何



第7図 A区出土石器実測図 (1-14 2/3、15 1/2)

れも黒曜石であり、1・3・5・6・7・10は腰岳系黒曜石、2・8・9は姫島産黒曜石である。11は姫島産黒曜石の石錐である。錐部は短い。12・13はサヌカイト製の石匙であり、ともに横型である。14はサヌカイト製のスクレイパーである。15は礫岩製の磨製石斧である。刃部は欠損している。また、図示はしていないがA1区遺物包含層中より2点の磨製石斧片（写真図版7-A・B）が出土している。

(3) その他の遺物

A区においては、前述までの縄文時代遺物の他に、小片であるため図示していないが弥生時代中期のものとみられる土器片数点が確認されている。

(2) B区の調査 (第8図)

1. 調査概要

B区は、A区南側の鶴河内川左岸の河岸段丘上に位置する。試掘調査の結果、遺構面が複数ある可能性があり、また地山がこの地域特有の砂質土で遺構確認が難しいことから、調査では期間短縮を目的として、機械により調査区を縦横断するトレンチをまず設定し、トレンチごとに遺構が確認された層位で全体の遺構検出作業にとりかかることにした。

トレンチ作業によって、遺構の掘り込み面と考えられる層が2層あることが明らかとなり、まずは上層の遺構検出を行ない、調査区全体に無数のピット群の広がりを確認すると、これらの遺構掘り下げと実測を行なった。

この上面の調査が完了した後、引き続き下層の遺構検出に移っていったが、トレンチの土層観察から遺構の確認される面は調査区の北側と南側に見られ、中央付近はすでにその層位に達し、下層で確認される遺構がすでに上面で検出されていたこともあり、掘り下げはその2カ所に限って行なった。その結果、多くの遺構が確認されたが、これらの遺構は、いずれも砂質土の地山に白灰色の砂質性の強い埋土であったため、遺構の確認についてはトレンチで土層を確認しながら慎重に調査を進めていった。

最終的には調査区北側で土坑3基、南側で竪穴遺構2基、集石遺構3基、土坑6基、溝状遺構1基、西側で土坑1基が検出された。

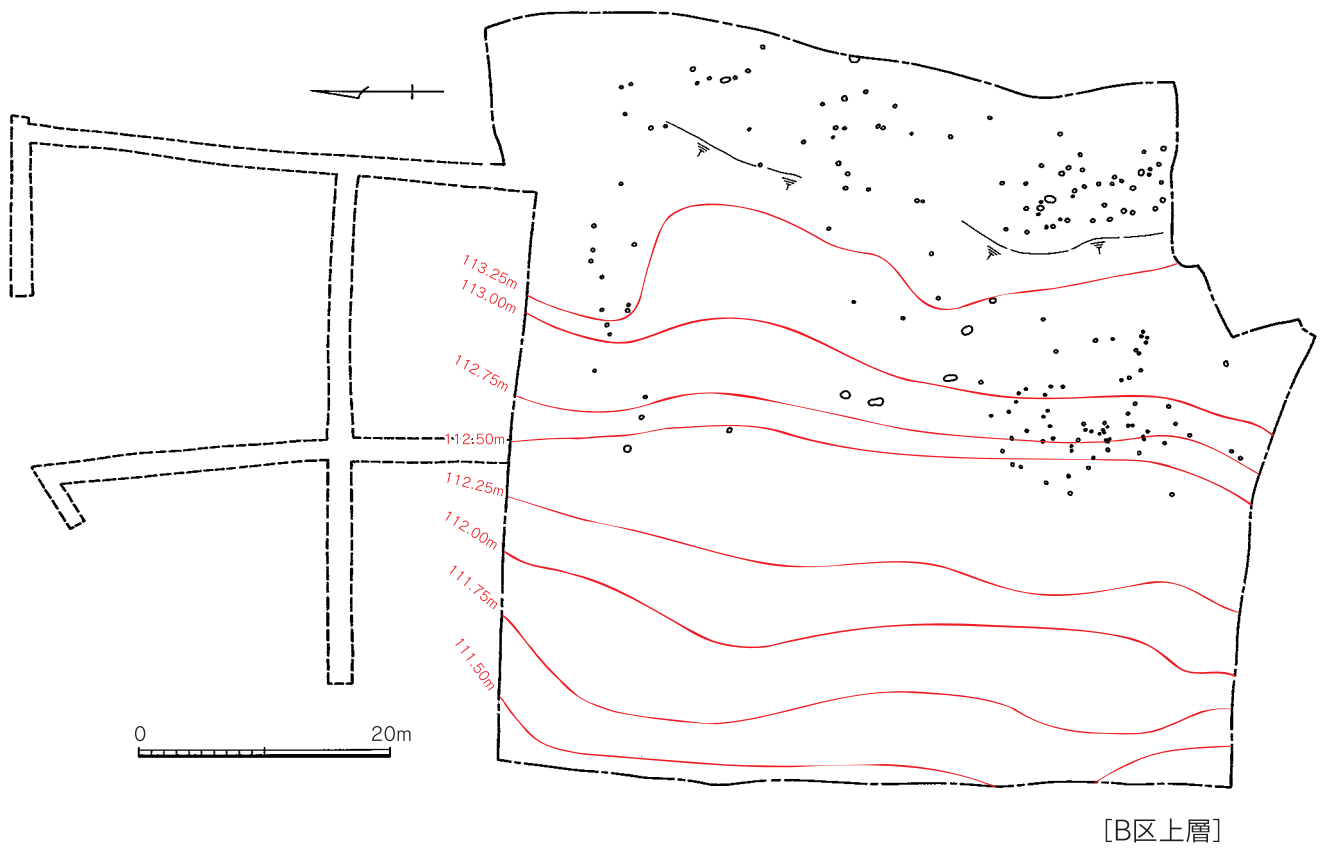
以下、調査区から出土した各遺構と遺物について説明を加えることとする。

なお、調査中14基の遺構を土坑として把握していたが、その後うち4基を樹木倒壊痕と判断したため、今回それらを省いて報告する。このため遺構名称が、発掘及び整理作業中用いていたもの、またはすでに報告している概要（平成13年、市教委発行の『平成12年度 日田市埋蔵文化財年報』）と異なることになるので、その変更分についてのみ、下記に示すこととする。

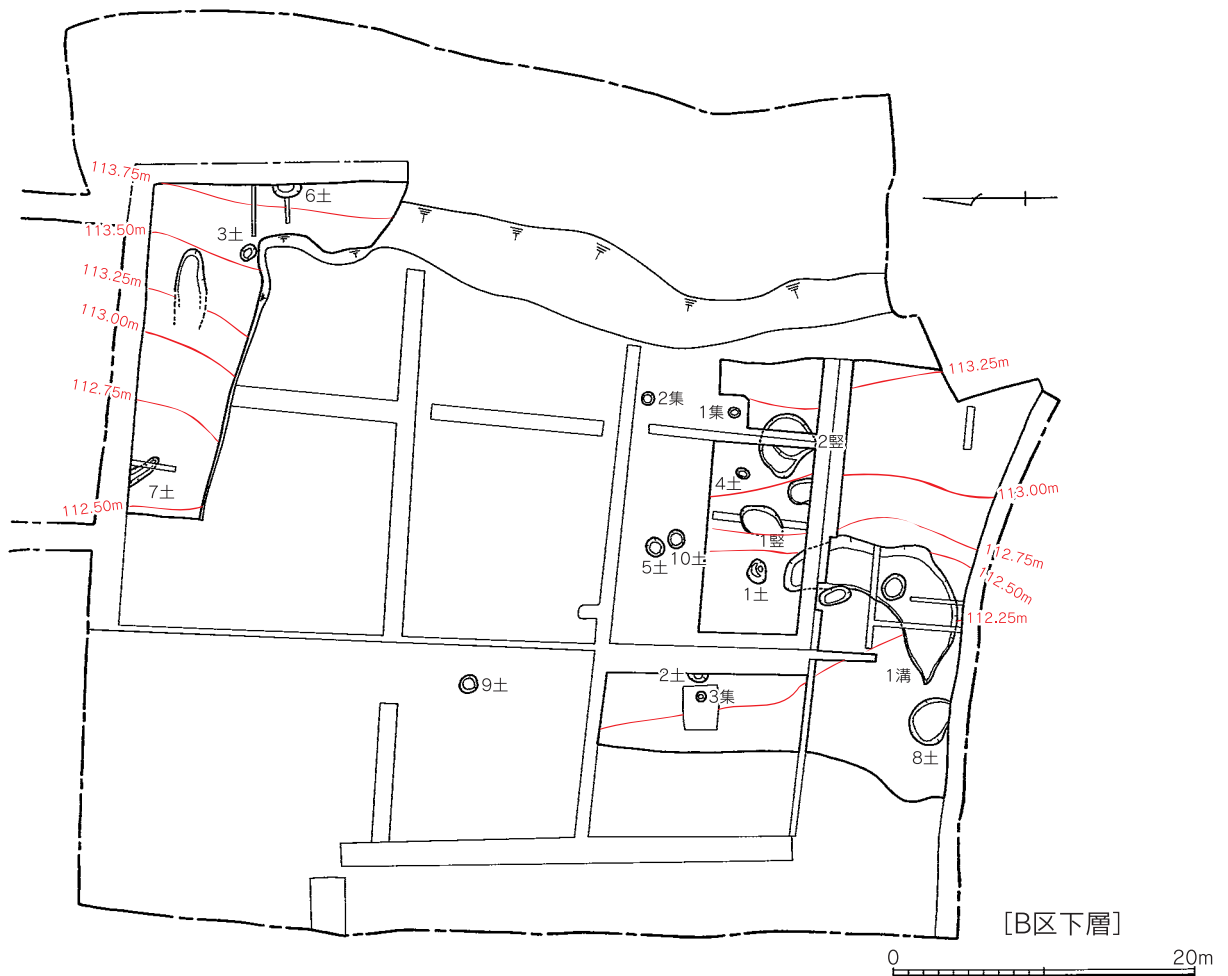
(旧) 7号土坑→5号土坑 (旧) 9号土坑→6号土坑 (旧) 10号土坑→7号土坑
(旧) 11号土坑→8号土坑 (旧) 13号土坑→9号土坑 (旧) 14号土坑→10号土坑

2. B区上層の遺構

B区上層からは多数のピット群が検出された。これらの遺構については、現地において建物と考えられる遺構の存在も検討したが、ピットはいずれも浅く、建物柱穴と考えられる遺構は少なく、また遺物もほとんどなかったため、どのような遺構かを把握することができなかった。



[B区上層]



[B区下層]

第8図 B区遺構配置図 (B区上層 1/600、B区下層 1/500)

3. B区下層の遺構と遺物

下層は上層と異なり、遺構からは縄文時代の遺物が数多く出土した。

1) 竪穴遺構 (第9図)

1号竪穴遺構

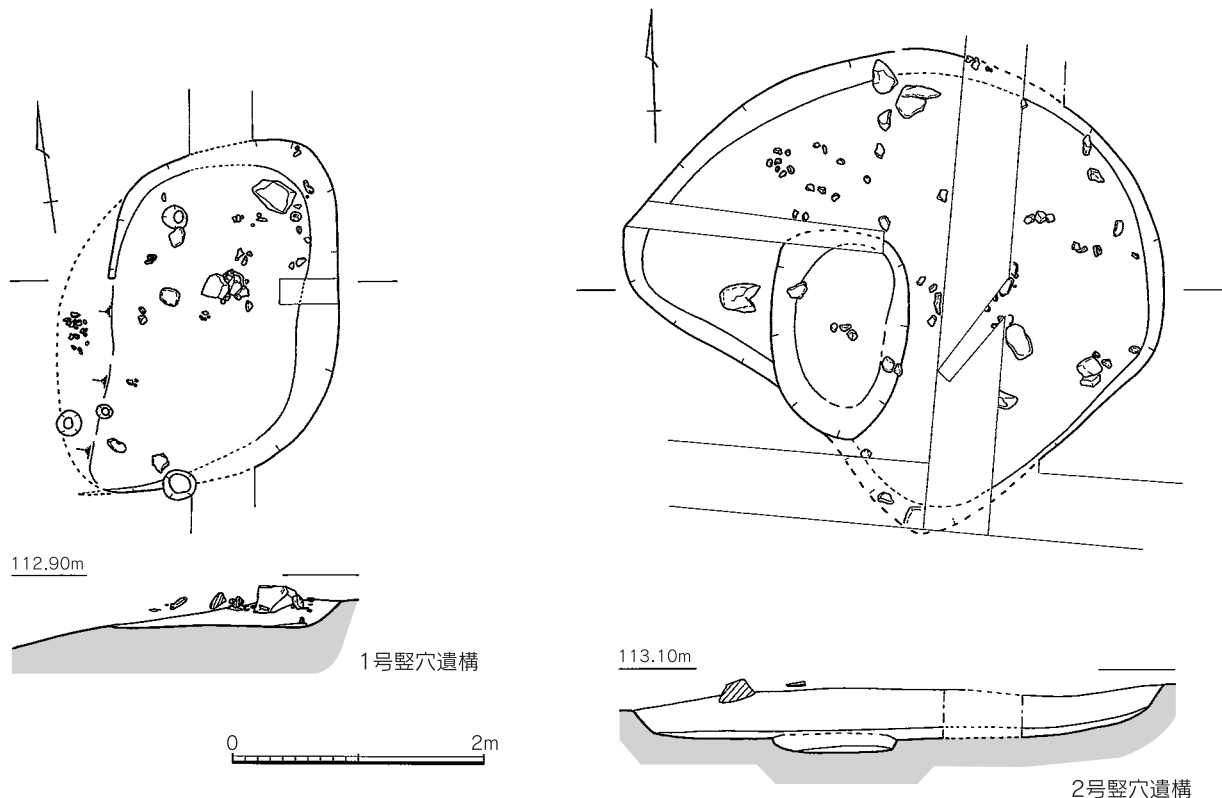
1号竪穴遺構は調査区南側で検出された。沖積地の緩やかな斜面をL字にカットするように掘り込まれていたが、遺構の下半は削平を受け、全体のプランは確認できなかった。残った部分から推測するとやや歪な隅丸長方形のプランと考えられる。確認面での遺構の幅は約2.6m、深さは最大で約20cmを測る。中からは多数の遺物が出土した。

第14図7・8は縄文時代前期の轟B式土器の口縁部片である。第15図35は焼成後の穿孔がみられる胴部片である。

2号竪穴遺構

2号竪穴遺構は1号竪穴遺構のすぐ東側で検出された。1号竪穴遺構と異なりプランがはっきり確認できず、土坑が重なりあっていた可能性もある。面的に広く遺物が遺構の中に入っていたことから竪穴遺構として取り扱っている。確認面での遺構の長軸は約4.3m、短軸は約3.7m、深さは約40cmを測る。遺構内からは多数の遺物が出土した。

第14図10・13・17・19は縄文時代前期の轟B式土器である。10は口縁部片であり、4条の隆起線文がみられる。他は胴部片である。第15図22・29も同じく前期の曾畑式土器胴部片である。22には横位の沈線文の上に刺突連点文が、29には横位の沈線文のみがみられる。何れも胎土には滑石が含まれている。

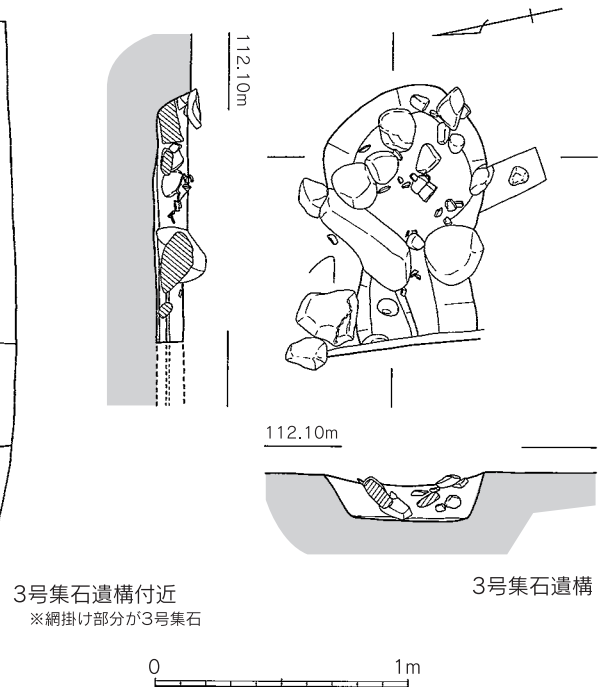
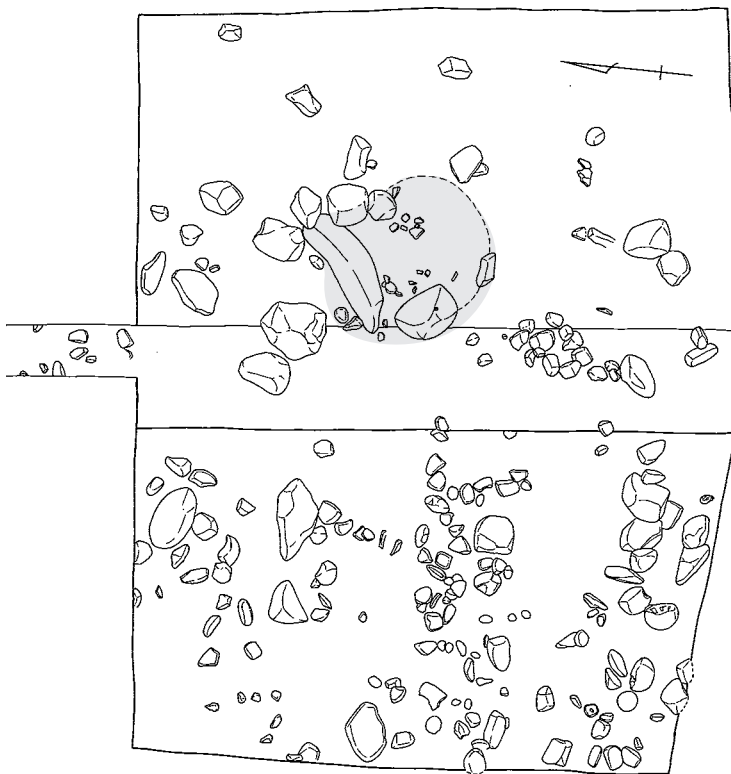
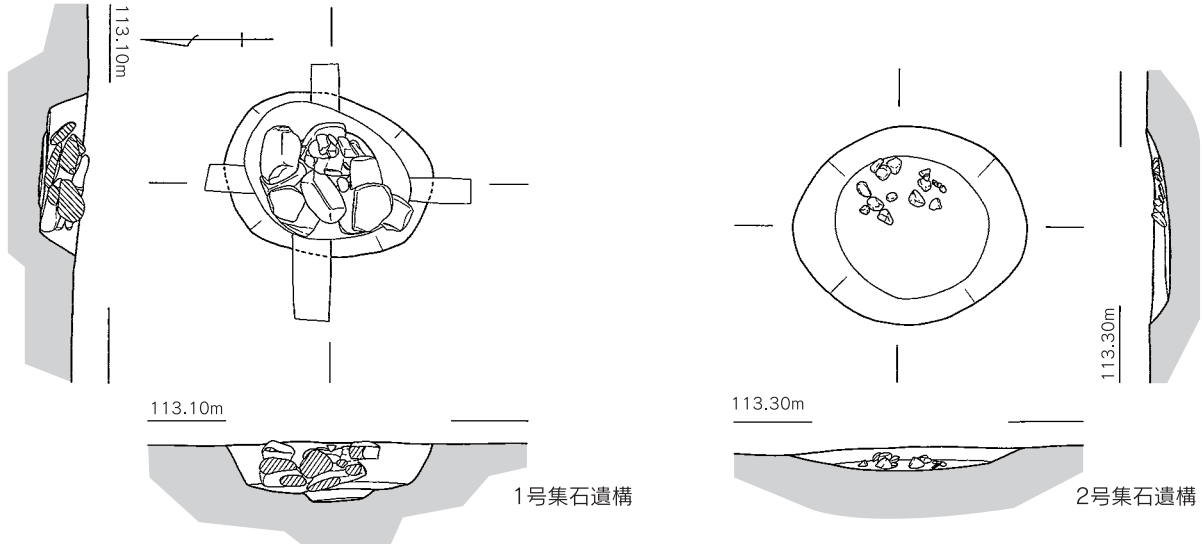


第9図 B区1・2号竪穴遺構実測図 (1/60)

2) 集石遺構 (第10図)

1号集石遺構

調査区南側で検出されたが、すでに上層段階で確認されていた。平面プランは楕円形を呈し、中に扁平な安山岩質の石が重ねられていた。いずれも被熱していた。長軸0.8m、短軸0.7m、深さは約23cmを測る。床面はほぼ平坦となり、中央付近はわずかに掘り窪めていた。



第10図 B区1~3号集石遺構実測図 (1/30)

2号集石遺構

1号集石遺構の北側で検出された。平面プランは楕円形を呈している。中に2～3cm程度の安山岩質の小石が10個程度確認された。熱を受けたものも数個あり、集石遺構としてここでは取り扱うことにする。長軸0.9m、短軸0.8m、深さ9cmで、断面皿状の掘り方を呈する。

3号集石遺構

調査区南側の低い位置で検出された。平面プランは楕円形を呈している。この集石周辺には多くの石が分布していたが、被熱した石も数点確認されている。この3号集石遺構は、平面楕円形のプランを呈し、それに取り付くように溝状の掘り込みが見られた。掘り込み面の内側には被熱した安山岩質の石がその掘り込み面の内側に据えられるように配置され、中から破片であるが数点遺物が出土した。確認面での規模は、長軸約1m、短軸約0.6m、深さ約13cmを測る。

第16図12は、円礫の中心に径約1.7cmの孔が穿かれた玉形をなす石器である。その形状等から人為的に作製されたものであることは間違いのないと思われるが、用途等は不明である。

3) 土坑 (第11・12図)

1号土坑

調査区南側で検出され、平面は不定形プランを呈する。長軸約1.5m、短軸約1.3m、深さは約65cmを測る。遺構の掘り方は、断面逆三角形を呈し、底面はわずかに平坦となっている。中からは河原石とともに数点遺物が出土した。

第14図2は縄文時代前期の轟B式土器の口縁部片である。

2号土坑

調査区南側で検出され、東側半分はトレンチにかかっていた。平面は不定形プランを呈する。遺構の幅は約1.1m、深さは約65cmを測る。遺構の掘り方は、断面皿状を呈し、底面もややレンズ状となる。中からは大きな河原石とともに数点遺物が出土した。

3号土坑

調査区北側で検出され、平面は不定形プランを呈する。長軸約1m、短軸約0.8m、深さは約8cmを測る。遺構の掘り方は、断面浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦となっている。中からは河原石とともに数点遺物が出土した。

4号土坑

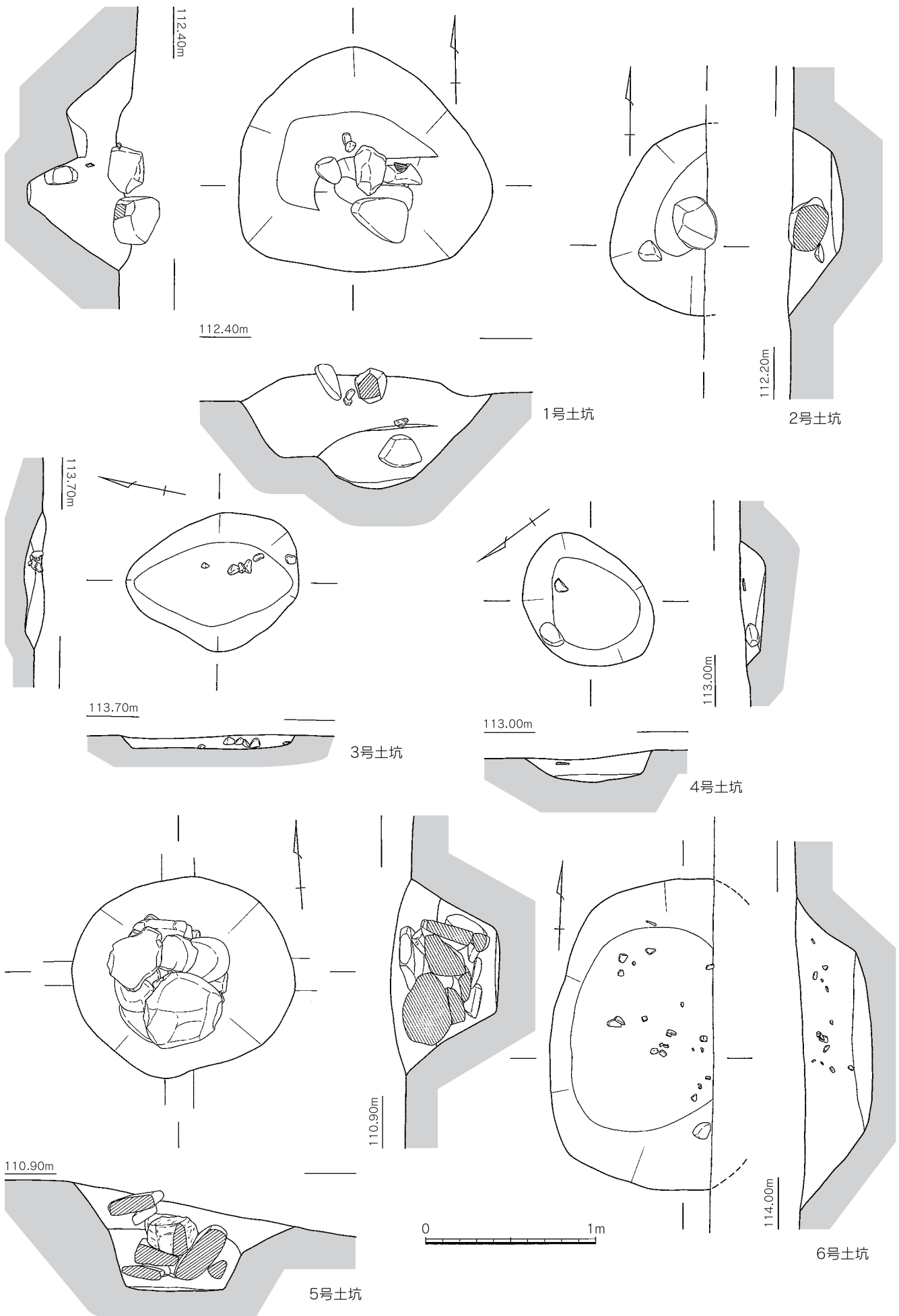
調査区南側で検出され、平面は不定形プランを呈する。長軸約0.9m、短軸約0.7m、深さは約15cmを測る。遺構の掘り方は、断面浅い皿状を呈し、底面はほぼ平坦となっている。中からは河原石とともに数点遺物が出土した。

5号土坑

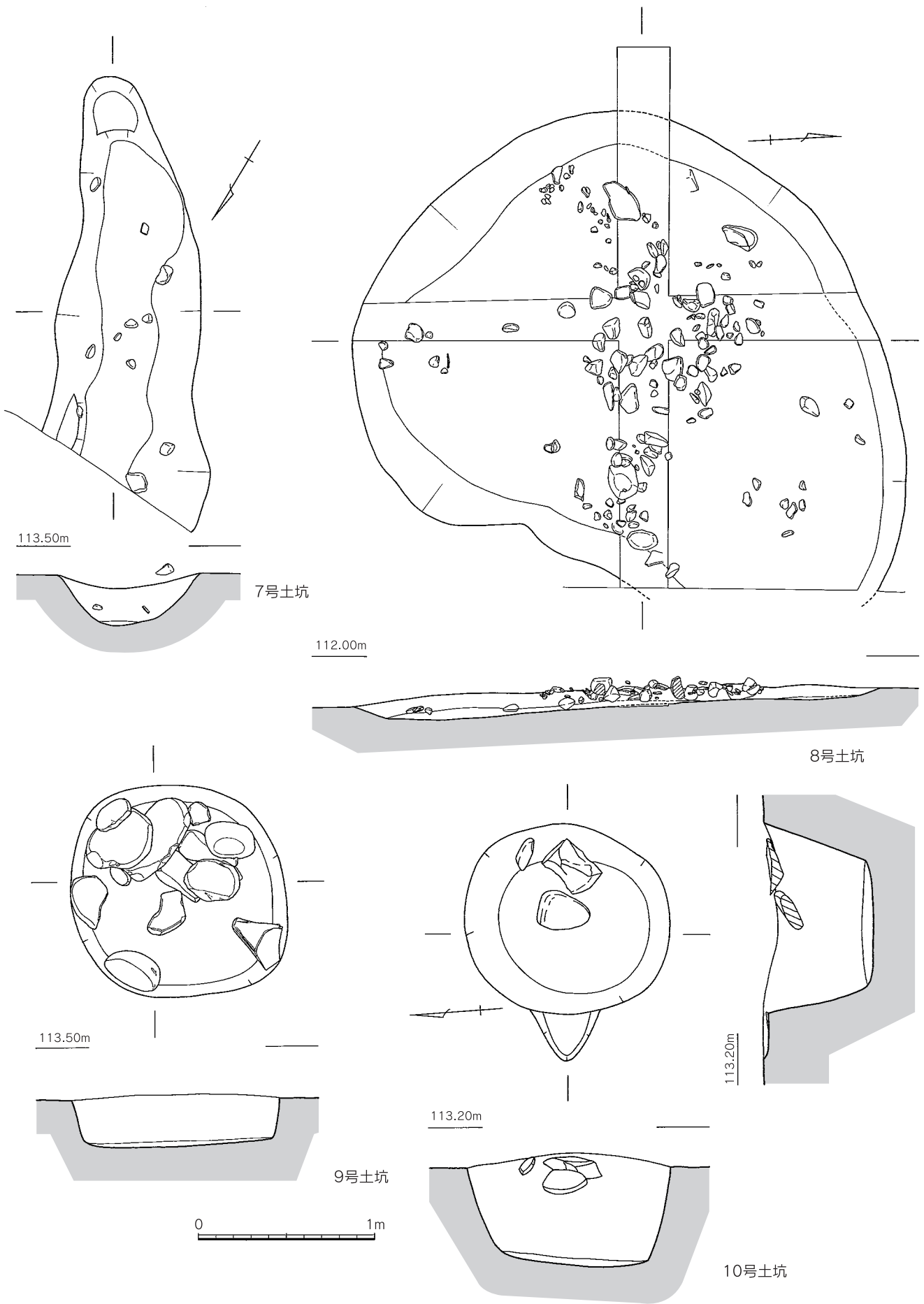
調査区南側で検出され、平面は楕円形プランを呈する。長軸約1.3m、短軸約1.2m、深さは約50cmを測る。遺構の掘り方は、断面播鉢状となり、底面はほぼ平坦となっている。中からは扁平で大きな河原石が多数重なりあって出土した。

6号土坑

調査区北側で検出され、東側半分はトレンチにかかっていた。平面は不定形プランを呈する。遺構の幅は約1.8m、深さは約40cmを測る。遺構の掘り方は、断面播鉢状となり、底面はほぼ平坦とな



第11图 B区1~6号土坑实测图 (1/30)



第12图 B区7~10号土坑实测图 (1/30)

っている。中からは数点遺物が出土した。

第16図8はサヌカイト製のスクレイパーである。

7号土坑

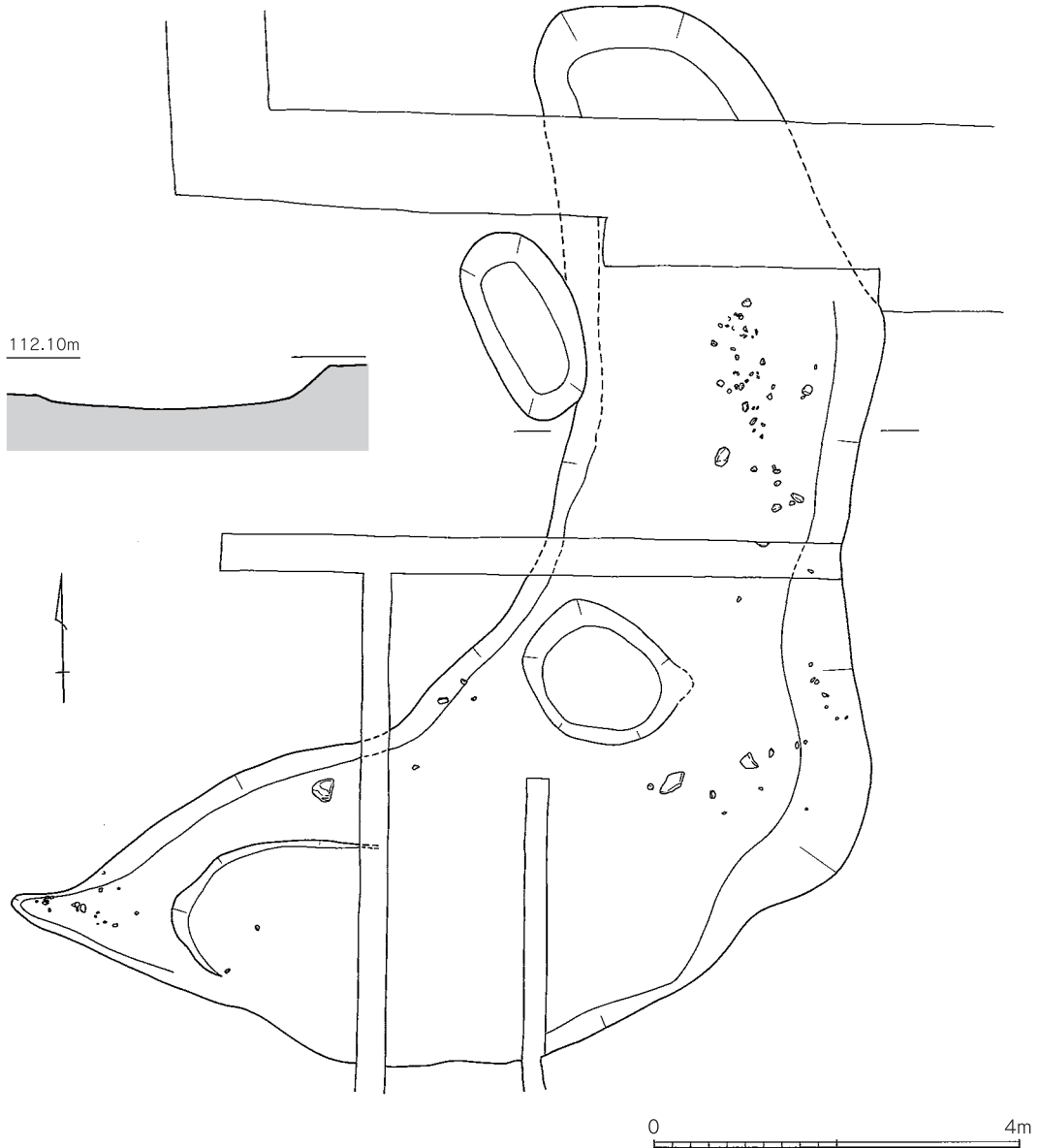
調査区北側で検出され、北側半分はトレンチにかかっていた。平面は溝状の不定形プランを呈する。遺構の幅は約0.8m、深さは約30cmを測る。遺構の掘り方は、断面「U」字状となっている。中からは数点遺物が出土した。

8号土坑

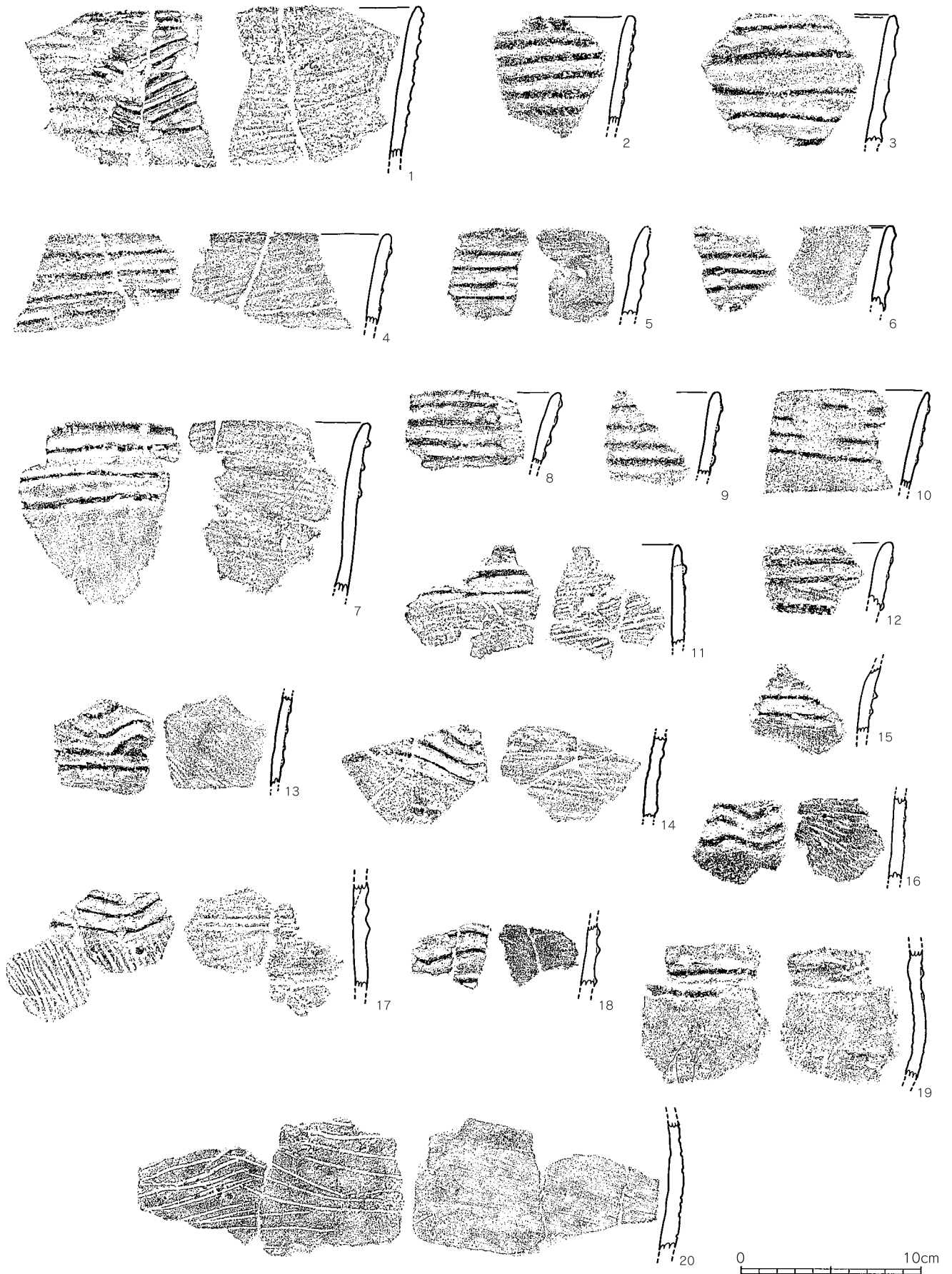
調査区南側で検出され、南側半分はトレンチにかかっていた。平面は不定形プランを呈する。長軸約3.3m、短軸約2.7m、深さは約15cmを測る。遺構の掘り方は、浅い皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。中からは数点遺物が出土した。

9号土坑

調査区西側で検出され、平面楕円形プランを呈する。長軸約1.4m、短軸約1.2m、深さは約30cmを測る。遺構の掘り方は、断面逆台形を呈し、床面はほぼ平坦である。中からは大きな河原石が重なって検出された。



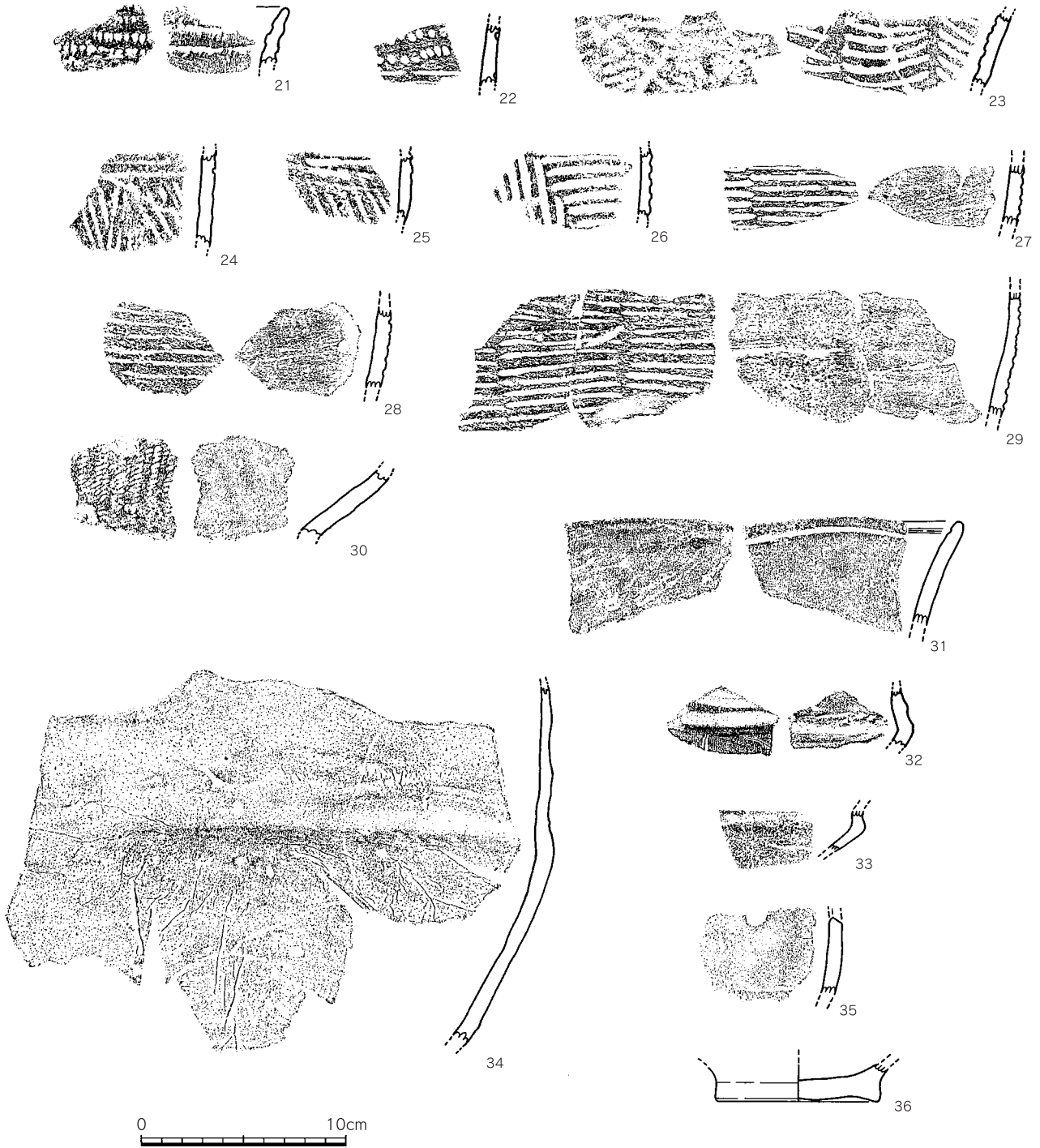
第13図 B区溝状遺構実測図 (1/80)



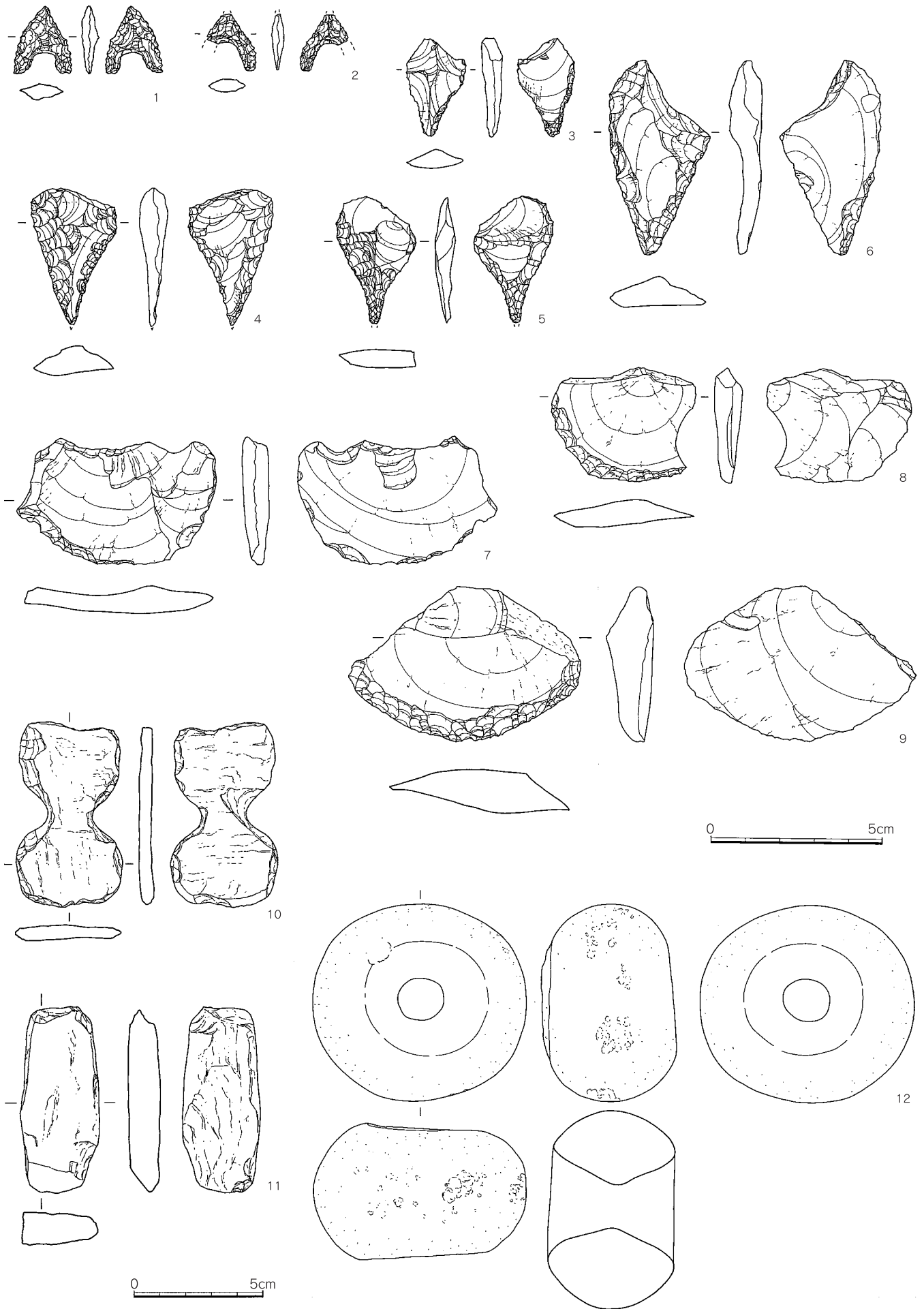
第14图 B区出土繩文土器実測图1 (1/3)

10号土坑

調査区南側で検出され、平面は楕円形プランを呈する。長軸約1.3m、短軸約1.2m、深さは約64cmを測る。遺構の掘り方は、断面逆台形を呈し、床面はほぼ平坦である。中からは上層で河原石や遺物が数点出土した。



第15図 B区出土縄文土器実測図2 (1/3)



第16图 B区出土石器实测图 (1~9 2/3、10~12 1/2)

4) 溝状遺構 (第13図)

調査区南側で検出された。平面プランが「逆L字」状となり、遺構の掘り方は浅く、断面は皿状を呈していた。溝の幅は最大で約4.6m、深さは約30cmを測る。遺構の中からは多数の遺物が出土した。

第14図11は縄文時代前期の轟B式土器の口縁部片である。第15図25は同じく前期の曾畑式土器の胴部片であり、胎土には滑石が含まれている。

5) その他の遺物

(1) 縄文土器 (第14・15図)

B区からは縄文時代前期を中心に、その後の中期から晩期にかけての縄文土器が確認されている。

1～19は前期の轟B式土器である。1～12は口縁部片であり、9条(1)から2条(11)の横方向に展開する隆起線文がみられる。13から19は胴部片である。胴下半部とみられる19以外は、胴上半部のものであろう。

20は沈線文の施された土器である。弧線と直線を組み合わせた沈線文などから、前述の轟B式土器に後続する「野口タイプ」・「プロト曾畑」などと称されていたものとみることが出来まいか。

21～29は前期の曾畑式土器である。21は口縁部片であり、内外面ともに押引文が施されている。23は口縁部近くの破片である。内面には横位の沈線文が施されている。24～29は胴部片である。24は横位の沈線文下に平行斜線文がみられる。26は四角文の一部分であろうか。27～29には横位の沈線文がみられる。なお、21・22・25～29には胎土に滑石が含まれている。

30はキャリパー状に開く口縁の下半部の破片とみられる。外面には全面縄文が施されていることやその器形から中期の船元式系の土器とみられる。

31・32は後期後葉の三万田式土器とみられるものである。31は深鉢の口縁部片である。口縁部内面に1条の沈線が横走されている。32は鉢もしくは注口土器の胴部屈曲部と思われ、屈曲部の上部には凹線が2条みられる。

33は浅鉢の肩部から胴部にかけての破片である。晩期前半の所産であろうか。

34は粗製深鉢の胴部片である。器面が荒れているため調整痕を窺うことは出来ないが、その器形などから後期～晩期の所産とみられる。

36は底部片である。後期～晩期の所産であろうか。

(2) 石器 (第16図)

1・2は石鏃である。ともに基部に抉入のある凹部無茎鏃である。3～6は石錐である。いずれも錐部は長くない。石材は4がサヌカイト、それ以外は姫島産黒曜石である。7～9はサヌカイト製のスクレイパーである。10は両側縁中央部のくびれた片岩製の分銅形石器である。11は断面隅丸長方形の棒状をなすものである。刃部とみられる下端部に磨きの痕跡が窺われる、磨製石斧であろうか。

IV まとめ

今回の調査では、A1区とB区において多くの縄文土器・石器などの遺物⁽¹⁾とともに、竪穴遺構・集石遺構・土坑・溝などの遺構が確認された。

縄文土器については、早期～晩期にかけてのものが出土している。

まず遺物包含層出土のものをみると、A1区で中期の船元式、後期後葉の三万田式⁽²⁾などが一定量みられるものの、その主体を占めるのはA1区・B区ともに前期の土器群である⁽³⁾。前期土器の大多数は、いわゆる轟B式土器であるが、それらとともに、A1区ではそれらに後続する「プロト曾畑」と称される一群、B区では曾畑式土器が一定量出土していることが、この遺跡においての一つの特徴として挙げられよう。続いて遺構より出土の土器⁽⁴⁾を見てみると、A1区では1号土坑から「プロト曾畑」と称されるもの、2号土坑から「轟B式」が出土しており、B区では1・2・3・5・6・8・9号土坑から「轟B式」、1・2号竪穴遺構及び溝状遺構から「轟B式+曾畑式」といった具合に、いずれの遺構からも前期所産の土器が見られる。ただし、前述の遺物包含層より出土の土器の状況や図面に残されている遺物の出土状況などから、それら遺構の所属時期を、すぐさま縄文時代前期に比定してしまうことには躊躇を覚える。よってこれら遺構の時期について、A1区の土坑は前期が一番の有力候補であるが、中期または後期の可能性も全く無いわけではないこと。B区の各種遺構においては前期の所産である可能性が高い。という指摘だけをおきたい。

最後に、石器類について本遺跡の特徴として2点のみ挙げておきたい。

①この遺跡において用いられた石器石材のうち、黒色の黒曜石はすべていわゆる腰岳系黒曜石⁽⁵⁾であり、近隣より産する小国産黒曜石は1点も見られない。②石器の器種組成において、石錐が一定量存在している。

以上、非常に簡単であるが大肥下河内遺跡の発掘調査で得ることの出来た情報を概観してみた。

本遺跡は、日田市域はもとより筑後川上流域及びその周辺における縄文時代の有数な遺跡と言える。今回は遺物・遺構の説明のみに終始してしまっただが、それらと詳細な周辺地形とを絡ませた検討が今後の課題である。

【註】

(1) 本報告書において、本遺跡出土遺物のうち図示出来るものすべての実測図を掲載しているわけではないことをお断りしておく。

土器に関しては、時期判断が可能なもの、文様・器形等が特徴的なものを中心に選択し、図示することとした。ただし、量的に多い「轟B式土器」については、その特徴を良く表しているものや比較的大きな破片のものを厳選した。石器に関しては、調査により250点以上が取り上げられている。この中からすでに発掘調査担当者が選択し、実測・製図作業の終了していた主要な製品類のみを掲載している。図示しなかった石器の中には、数点の石鏃や磨製石斧片のほかに、多くの二次加工剥片や使用痕剥片などもみられる。

(2) 三万田式土器の中でも古手にあたる、西平式土器と同様の器形となる一群。

(3) なお遺物包含層については、必ずしも下層より出土のものが上層出土のものよりも古いとは限らないということが、出土土器に書かれた注記の内容から窺うことが出来る。

(4) 時期判断が出来る破片のみから。

(5) 本書で用いる「腰岳系黒曜石」とは、いわゆる西北九州産の漆黒色黒曜石のことであり、「腰岳産黒曜石」というように産地を限定しているのではない。つまり、肉眼観察や化学分析でその分類が困難とみられる牟田産黒曜石なども含めている、と理解して頂きたい。

第2表 出土縄文土器観察表(1)

挿図番号	写真 図版	調査 区	出土位置等 (注記)	器 面 調 整		色 調		胎 土						備 考			
				外 面	内 面	外 面	内 面	角 閃石	斜 長石	石 英	雲 母	滑 石	白 色粒		赤 色粒	黒 曜石	
第5図1	5	A	1区包含層	山形文→ナデ	ナデか	薄茶色	淡褐色	○	○					○			
第5図2	5	A	黒色土	襷糸文→ナデか	ナデか	明黄褐色	淡褐色	○	○					○	○		
第5図3	5	A	下層	ミガキか	ミガキか (ケズリ状の痕跡となっている)	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○					○	○		
第5図4	5	A	1区 包含層	ナデ	ミガキ	明褐色	淡黒褐色	○	○					○	○		
第5図5	5	A	1区 包層	ナデ	ミガキ	淡茶色	淡茶褐色	○	○					○			
第5図6	5	A	下層	ミガキ	ミガキか (ケズリ状の痕跡となっている)	黒褐色	黒褐色	○	○					○			
第5図7		A	黒色土	ナデ	ミガキか (ケズリ状の痕跡となっている)	淡茶褐色	白黄土色	○	○					○			
第5図8		A	2土コウNo.4	ナデ	丁寧なナデ	淡褐色	淡黒褐色	○	○					○	○		
第5図9	5	A	1区 包層	ミガキ	ミガキか	淡茶褐色	淡茶灰色	○	○					○	○		焼成後穿孔あり
第5図10	5	A	A区一括	ナデ	条痕→ナデ	淡黒褐色	淡黒褐色	○	○	○				○			
第5図11	5	A	下層	ミガキか (ケズリ状の痕跡となっている)	ミガキか (ケズリ状の痕跡となっている)	明褐色	淡黒褐色	○	○					○	○		
第5図12	5	A	下層	ミガキか	不明瞭	淡褐色	白黄土色	○	○					○			
第5図13	5	A	黒色土	沈線→ミガキ	ミガキ	淡黒褐色	褐色	○	○					○			
第5図14	5	A	トレ	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	明茶色	淡褐色		○	○				○			
第5図15		A	1区包含層	ミガキか	ミガキか (ケズリ状の痕跡となっている)	黒褐色	淡黒褐色	○	○					○	○		
第5図16		A	黒色土	ナデか	ミガキか	黒褐色	黒褐色	○	○					○	○		
第5図17	5	A	1区包層	沈線→丁寧なナデ	ミガキか (ケズリ状の痕跡となっている)	淡褐色	淡褐色	○	○					○			
第5図18	5	A	黒色土	沈線→ナデ	丁寧なナデ	明褐色	黄褐色	○	○					○	○		
第5図19	5	A	下層	二枚貝条痕→沈線→ナデ	ナデ	淡黄土色	淡黄褐色	○	○					○	○		
第5図20	5	A	トレ	沈線→ナデ	ナデ	褐色	灰褐色	○	○					○			
第5図21	5	A	1土コウ	沈線→ミガキ	丁寧なナデ	明褐色	明黒褐色	○	○					○	○		
第5図22	5	A	黒色土	二枚貝条痕→二枚貝腹縁刺突→ナデ (口唇部刻目も二枚貝腹縁によるもの)	ナデ	淡茶色	明茶色		○	○				○	○		
第5図23	6	A	A区一括	二枚貝条痕→二枚貝腹縁刺突→ナデ	ナデ	淡茶色	淡茶色		○	○				○	○		
第5図24	6	A	黒色土	二枚貝腹縁刺突→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	淡褐色	明黄土色		○	○				○			
第5図25	6	A	1区	刺突→二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	淡褐色	淡褐色		○	○				○	○		
第6図26	6	A	下層	縄文→ナデ	丁寧なナデ	淡黄褐色	褐色	○	○	○	○			○	○		
第6図27	6	A	黒色土層	縄文→ナデ	ナデ	淡茶褐色	淡黒褐色	○	○	○	○						
第6図28		A	黒色土	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	明褐色	淡黒褐色		○	○	○			○			
第6図29	6	A	下層	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	淡褐色	淡黒褐色		○	○	○			○			
第6図30	6	A	黒色土層	不明瞭	丁寧なナデか	淡褐色	淡黄褐色	○	○					○	○		
第6図31	6	A	1区 黒色土層	縄文・沈線→ミガキ	ミガキ	淡黄土色	淡黄灰色	○	○					○	○		
第6図32	6	A	下層?	沈線→ミガキ	ミガキ	明褐色	淡黒褐色	○	○					○	○		
第6図33	6	A	黒色土層	縄文→沈線→ミガキ	ミガキ	黄褐色	暗黄褐色	○	○					○	○		

第3表 出土縄文土器観察表(2)

挿図番号	写真 図版	調査 区	出土位置等 (注記)	器 面 調 整		色 調		胎 土							備 考		
				外 面	内 面	外 面	内 面	角 閃石	斜 長石	石 英	雲 母	滑 石	白 色 粒	赤 色 粒		黒 曜 石	
第6図 34	6	A	1区黒色土層	沈線→ミガキ	ミガキ	淡黄土色	淡黄灰色	○	○					○	○		
第6図 35	6	A	P 1 8	縄文→沈線→ミガキ	ミガキ	淡茶褐色	淡灰褐色	○	○					○	○		
第6図 36	6	A	1区包含層	沈線→ミガキ	ミガキ	明褐色	淡褐色	○	○					○	○		
第6図 37	6	A	1区	沈線→ミガキ	ミガキ	淡褐色	淡褐色	○	○					○	○		
第6図 38		A	黒色土	ナデ	ミガキ	淡褐色	淡黄土色	○	○					○	○		
第6図 39		A	黒色土層	ミガキか	不明瞭	明褐色	灰褐色	○	○					○	○		焼成後穿孔あり
第6図 40	6	A	P 2 3	ナデ	ナデ	淡黄茶色	黒灰色	○	○					○			
第6図 41	6	A	黒色土	丁寧なナデ	丁寧なナデ	淡茶色	茶褐色	○	○					○	○		
第6図 42	6	A	1区 黒色土層	ナデ	ナデ	淡黄茶色	淡黄灰色	○	○					○	○		
第14図 1	7	B	上層	ナデか	二枚貝条痕→ナデ	淡黄茶色	淡黄灰褐色	○	○					○	○		
第14図 2	7	B	1土コウ P 1	不明瞭	丁寧なナデか	黄茶色	淡黄茶色	○	○					○			
第14図 3	8	B	B区一括	ナデ	ナデか	淡黄茶色	淡黄茶色	○	○					○	○		
第14図 4	8	B	上層	不明瞭	二枚貝条痕→ナデ	淡褐色	淡褐色	○	○								
第14図 5		B	3トレ	ナデ	ナデ	淡褐色	淡黒褐色	○	○					○	○		
第14図 6		B	3トレ	ナデ	ナデ	褐色	黄褐色	○	○					○	○		
第14図 7	8	B	1 堅 3	ナデ	二枚貝条痕→ナデ	淡茶褐色	淡褐色	○	○	○				○			
第14図 8		B	1 堅穴 No.17	不明瞭	不明瞭	淡褐色	淡褐色			○	○						
第14図 9		B	8号土坑	不明瞭	不明瞭	暗茶色	褐色	○	○					○	○		
第14図 10	8	B	2 堅穴 イコウ	不明瞭	不明瞭	黄灰褐色	淡黄灰色	○						○	○		
第14図 11	8	B	1 溝 No.26	二枚貝条痕→丁寧なナデ	二枚貝条痕→ナデ	明黒褐色	淡褐色	○	○					○			
第14図 12		B	B区一括	ナデか	ナデか	淡茶褐色	淡灰褐色	○	○					○			
第14図 13	8	B	2 堅 No.8	不明瞭	二枚貝条痕→ナデ	淡褐色	淡黒褐色	○	○	○				○			
第14図 14	8	B	B区一括	不明瞭	二枚貝条痕→ナデ	明褐色	淡褐色	○	○					○			
第14図 15	8	B	上層	ナデか	不明瞭	茶褐色	淡黄茶色	○	○	○				○			
第14図 16		B	3トレ	ナデか	二枚貝条痕→ナデか	明黄土色	淡黒褐色	○	○	○				○			
第14図 17	8	B	仮2堅サブトレ	二枚貝条痕→ナデ	二枚貝条痕→ナデ	淡褐色	淡灰褐色	○	○	○				○			
第14図 18		B	3区包2層	丁寧なナデ	丁寧なナデ	淡褐色	淡茶褐色	○	○	○				○			
第14図 19	8	B	2 堅 No.5	ナデ	不明瞭	淡褐色	淡黄褐色	○	○	○				○	○		
第14図 20	8	B	B区一括	ナデ→沈線か	ナデ	褐色	淡褐色	○	○					○			
第15図 21	8	B	B区一括	連点→ナデ	不明瞭	淡黄茶色	淡黄茶色							○			
第15図 22	8	B	2 堅 イコウ	不明瞭	不明瞭	暗白茶色	白茶色							○			
第15図 23	8	B	B区一括	不明瞭	沈線→ナデ	淡黄茶色	淡黄土色	○	○	○						○	
第15図 24	8	B	1トレ上層	不明瞭	不明瞭	黄褐色	黄褐色	○	○					○			
第15図 25	8	B	1ミゾー5	不明瞭	不明瞭	黄茶色	黄茶色							○	○		

第4表 出土縄文土器観察表(3)

挿図番号	写真 図版	調査 区	出土位置等 (注記)	器 面 調 整		色 調		胎 土						備 考			
				外 面	内 面	外 面	内 面	角 閃 石	斜 長 石	石 英	雲 母	滑 石	白 色 粒		赤 色 粒	黒 曜 石	
第15図 26	8	B	3トレ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	明褐色	明茶褐色						○				
第15図 27	8	B	包2層	沈線→ナデか	条痕→ナデか	明褐色	明褐色						○				
第15図 28		B	3区包含層	不明瞭	ナデか	淡黄茶色	明褐色						○		○		
第15図 29	9	B	2堅穴 No.5	沈線→ナデか	条痕→ナデか	淡茶褐色	淡茶褐色						○				
第15図 30	9	B	B区一括	縄文→ナデ	ナデ	淡黄茶色	黄茶色	○	○	○	○		○				
第15図 31	9	B	カクラン	ミガキ	ミガキ	淡茶色	淡黄褐色	○	○				○	○			
第15図 32	9	B	包層	ミガキ	ミガキ	明黒褐色	淡黄茶色	○	○				○	○			
第15図 33		B	P1	不明瞭	不明瞭	淡黄褐色	黄褐色	○	○		○		○	○			
第15図 34	9	B	南西風倒木	不明瞭	不明瞭	淡黄土色	淡黄土色	○	○				○	○	○		
第15図 35		B	1堅	丁寧なナデ	不明瞭	淡黄茶色	淡茶色			○	○	○					焼成後穿孔あり
第15図 36		B	包層	ナデか	不明瞭	淡黄茶色	黄茶色	○	○				○	○			

第5表 出土石器観察表

挿図番号	写真 図版	調査 区	出土位置等 (注記)	器 種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	備 考
第7図 1	6	A	黒色土	石鏃	腰岳系黒曜石	3.60	2.10	0.45	1.75	
第7図 2	7	A	黒色土	石鏃	姫島産黒曜石	1.70	1.50	0.36	0.48	
第7図 3	7	A	黒色土	石鏃	腰岳系黒曜石	1.45	1.05	0.25	0.27	
第7図 4	7	A	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	1.60	1.35	0.45	0.58	
第7図 5	7	A	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	2.00	1.10	0.25	0.37	
第7図 6	7	A	黒色土層	石鏃	腰岳系黒曜石	1.90	1.95	0.35	0.89	剥片鏃
第7図 7	7	A	黒色土層	石鏃	腰岳系黒曜石	2.50	1.75	0.35	1.04	
第7図 8	7	A	黒色土層	石鏃	姫島産黒曜石	1.60	1.90	0.45	1.21	
第7図 9	7	A	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.15	0.35	0.38	
第7図 10	7	A	黒色土	石鏃	腰岳系黒曜石	1.65	0.80	0.40	0.37	
第7図 11	7	A	1区	石錐	姫島産黒曜石	1.90	1.45	0.35	0.57	
第7図 12	7	A	1区包層	石匙	サヌカイト	2.50	3.80	0.45	2.94	
第7図 13	7	A	1区黒色土層	石匙	サヌカイト	3.65	4.50	0.80	12.53	
第7図 14	7	A	一括	スクレイパー	サヌカイト	3.85	4.55	1.05	17.19	
第7図 15	7	A	1区包層	磨製石斧	礫岩	9.85	7.70	4.10	433.67	
第16図 1	9	B	3号集石西	石鏃	サヌカイトか	1.95	1.70	0.50	1.03	
第16図 2	9	B	包含層	石鏃	サヌカイト	1.60	1.40	0.40	0.50	
第16図 3	9	B	3トレ	石錐	姫島産黒曜石	2.85	1.70	0.60	2.06	
第16図 4	9	B	一括	石錐	サヌカイト	5.65	2.95	0.95	9.65	
第16図 5	9	B	包層	石錐	姫島産黒曜石	4.00	2.50	0.85	5.09	
第16図 6	9	B	包含層	石錐	姫島産黒曜石	3.65	2.35	0.60	3.84	
第16図 7	9	B	包層	スクレイパー	サヌカイト	3.35	4.20	0.80	11.21	
第16図 8	9	B	9土コウ S-2	スクレイパー	サヌカイト	3.70	5.80	0.80	17.07	
第16図 9	9	B	包上層	スクレイパー	サヌカイト	4.55	6.80	1.35	32.43	
第16図 10	9	B	カクラン	分銅形石器	片岩	7.25	4.15	0.60	28.01	
第16図 11	9	B	トレ	磨製石斧か	頁岩	7.20	3.05	1.25	36.91	
第16図 12	9	B	3集 No.1	玉形石製品	安山岩	7.65	8.30	5.30	419.83	



大肥下河内遺跡遠景



A区全景



A 1区遠景



A 1区下層近景 1



A 1区下層近景 2



A 2区遠景

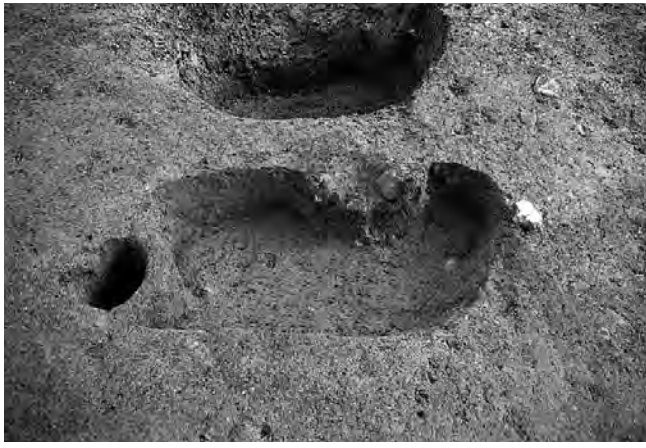


A区 1号土坑



A区 3号土坑

写真図版2



A区2号土坑



A区2号土坑遺物出土状況



B区上層近景



B区下層全景



B区下層近景



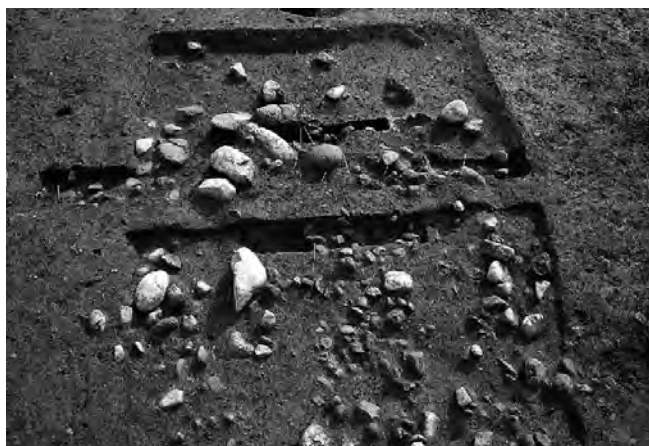
B区1号竖穴遺構



B区2号竖穴遺構



B区2号集石遺構



B区3号集石遺構付近



B区3号集石遺構



玉形石製品出土状況



B区1号土坑



B区2号土坑



B区4号土坑



B区5号土坑



B区6号土坑

写真図版4



B区7号土坑



B区8号土坑



B区9号土坑



B区10号土坑



B区5・10号土坑



B区縄文土器出土状況



作業風景



発掘調査に参加された方々



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-9



5-10



5-11



5-12



5-13



5-14



5-17



5-18



5-19



5-20



5-21



5-22

写真図版6



5-23



5-24



5-25



6-26



6-27



6-29



6-30



6-31



6-32



6-33



6-34



6-35



6-36



6-37



6-40



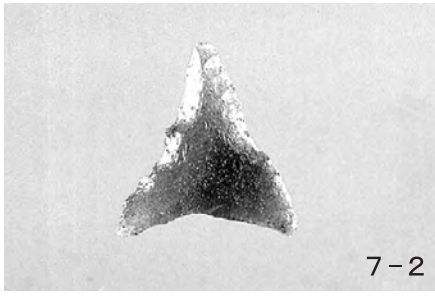
6-41



6-42



7-1



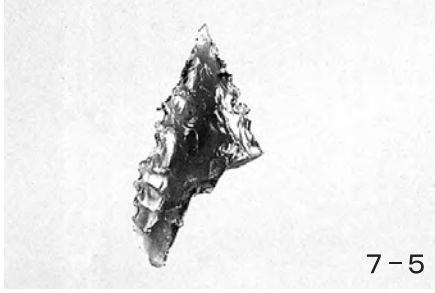
7-2



7-3



7-4



7-5



7-6



7-7



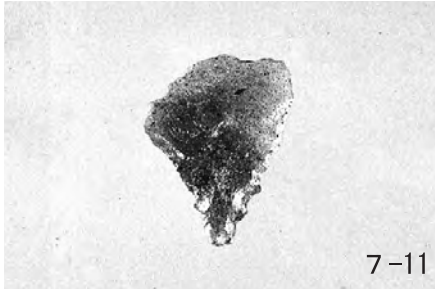
7-8



7-9



7-10



7-11



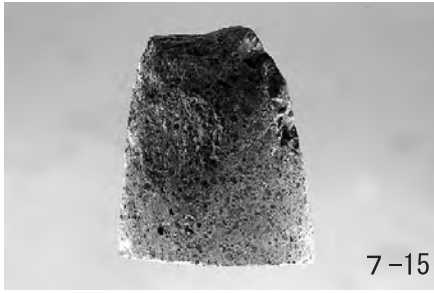
7-12



7-13



7-14



7-15



A



B



14-1



14-2

写真図版8



14-3



14-4



14-7



14-10



14-11



14-13



14-14



14-15



14-17



14-19



14-20



15-21



15-22



15-23



15-24



15-25



15-26



15-27



15-29



15-30



15-31



15-32



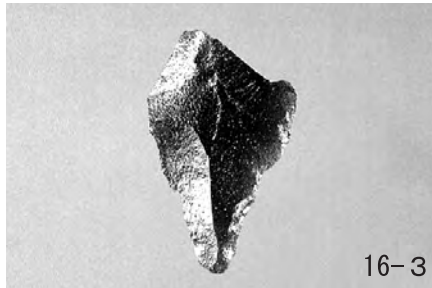
15-34



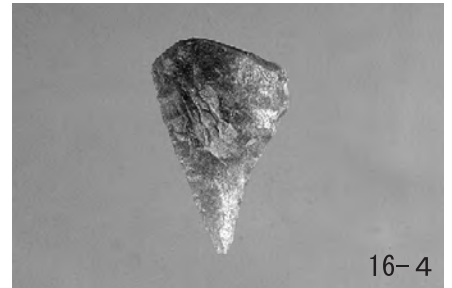
16-1



16-2



16-3



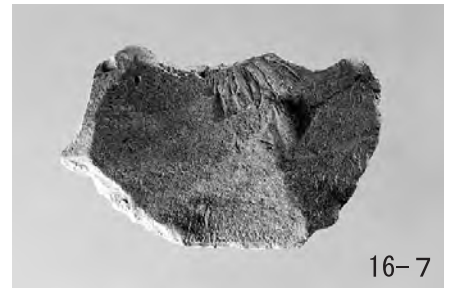
16-4



16-5



16-6



16-7



16-8



16-9



16-10



16-11



16-12a



16-12b

報告書抄録

ふりがな	おおひしもかわちいせき
書名	大肥下河内遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	63
編著者名	今田秀樹・土居和幸・行時志郎
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年2月17日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大肥下河内 遺跡	大分県日田市 大字鶴河内 字小原 4417-4ほか	44204-6	651004	33°22'24"	130°53'34"	20001204 ～20010228	5,950㎡	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大肥下河内 遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴遺構 2基 集石遺構 3基 土坑 10基 溝状遺構	縄文土器 石器	

大肥下河内遺跡

2006年2月17日

編集 日田市教育委員会 文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印刷 ヨコヤマ印刷
〒877-0008 大分県日田市丸山1丁目2-12